

Sun Fire X4170 M2 および X4270 M2 サーバー

設置マニュアル



Part No. 821-1620-10
2010 年 4 月、Revision A

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are “commercial computer software” or “commercial technical data” pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, duplication, disclosure, modification, and adaptation shall be subject to the restrictions and license terms set forth in the applicable Government contract, and, to the extent applicable by the terms of the Government contract, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software License (December 2007). Oracle America, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション (人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む) への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性 (redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用了ことに起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

Oracle は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。Oracle と Java は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

AMD, Opteron, AMD ロゴ, AMD Opteron ロゴは, Advanced Micro Devices, Inc. の商標または登録商標です。Intel, Intel Xeon は, Intel Corporation の商標または登録商標です。すべての SPARC の商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc. の商標または登録商標です。UNIX は X/Open Company, Ltd. からライセンスされている登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。



目次

はじめに vii

1. Sun Fire X4170 M2 および X4270 M2 サーバーの取り付け準備 1

必要な工具および機器 1

サーバー設置作業のチェックリスト 2

梱包を開く 3

開梱 3

パッケージ内容のリスト 4

オプション 4

静電気放電に関する注意事項 4

サーバーの説明 5

フロントパネルの機構 5

背面パネル 7

サーバーがサポートする部品 9

Sun Fire X4170 M2 サーバーがサポートする部品 9

Sun Fire X4270 M2 サーバーがサポートする部品 10

サーバーの仕様 11

物理仕様 11

電気仕様 12

環境要件 13

2.	スライドレールによるサーバーのラックへの取り付け	15
	取り付けを開始する前に	16
	サーバー設置プロセスの概要	16
	レール構成部品	16
	サービスラベル	16
	ラックの互換性	17
	スライドレールの分解	18
	▼ ボルト止めスライドレールの分解	19
	▼ 工具不要スライドレールの分解	20
	サーバーへの取り付けブラケットの取り付け	20
	▼ 固定部品の取り付け	20
	ラックへのスライドレール構成部品の取り付け	22
	▼ ボルト止めスライドレール構成部品の取り付け	22
	▼ 工具不要スライドレール構成部品の取り付け	25
	スライドレール構成部品へのサーバーの設置	26
	▼ スライドレール構成部品へのサーバーの設置	26
	Sun Fire X4170 M2 サーバーへのケーブル管理アームの取り付け	29
	▼ ケーブル管理アームの取り付け	29
	Sun Fire X4270 M2 サーバーへのケーブル管理アームの取り付け	36
	▼ ケーブル管理アームの取り付け	36
	スライドレールと CMA の動作の確認	43
	▼ スライドレールと CMA の動作の確認	43
3.	サーバーのセットアップ	45
	ケーブルの接続	45
	▼ サーバーのケーブル接続	47
	SP の初期構成用のスタンバイ電源の供給	47
	▼ サーバーへのスタンバイ電源の供給	48

サーバーへの初めての主電源投入	48
▼ サーバーへの主電源の投入	48
サーバーの主電源の切断	50
▼ 主電源を切断する	50
4. ILOM の設定	51
IP 設定作業のチェックリスト	52
ILOM へのログイン	53
ILOM SP インタフェースについて	53
▼ シリアル接続を使用して ILOM にログインする	53
▼ Ethernet 接続から CLI を使用して ILOM にログインする	54
IP アドレスの設定	55
▼ BIOS 設定ユーティリティを使用した ILOM SP IP アドレスの表示 または割り当て	56
▼ ILOM CLI を使用した ILOM SP IP アドレスの表示または割り当て	57
ILOM からのログアウト	58
▼ CLI を使用した ILOM からのログアウト	58
サーバーの管理	58
5. オペレーティングシステムのセットアップ	61
取り付けを開始する前に	62
サポートされているオペレーティングシステム	62
インストールのためのワークシート	64
インストール済みのオペレーティングシステムの設定	66
6. インストール済みの Solaris 10 オペレーティングシステムの設定	67
取り付けを開始する前に	68
サーバー RAID ドライブの設定	68

インストール済みの Solaris 10 オペレーティングシステムの設定	69
▼ ネットワーク経由でのシステムへのアクセス	69
▼ システムへのローカルなアクセス	70
▼ インストール済みの Solaris 10 OS を設定する	72
▼ (省略可能) コンソール出力のビデオポートへのリダイレクト	73
▼ (省略可能) GRUB メニューを自動起動に変更する	74
Solaris 10 オペレーティングシステムのユーザー情報	74
Solaris 10 のユーザーマニュアル	74
Solaris インストールプログラムの使用	75
Solaris オペレーティングシステムの再インストール	76
Solaris オペレーティングシステムのダウンロード	76
7. 補足情報	77
セットアップに関するトラブルシューティング	77
サーバーのシリアル番号を確認する	80
索引	81

はじめに

『Sun Fire X4170 M2 および X4270 M2 サーバー設置マニュアル』では、ハードウェアのインストール設置手順とインストール済みの Oracle Solaris オペレーティングシステムの設定手順を説明します。これらの手順を実行すると、サーバーを設定および使用できるようになります。

本書は、サーバーシステムを理解しているシステム管理者、ネットワーク管理者、およびサービス技術者を対象としています。

製品のアップデート

Oracle の Sun Fire X4170 M2 および X4270 M2 サーバー用にダウンロードできる製品のアップデートについては、次の Web サイトを参照してください。

(<http://www.sun.com/download/index.jsp>)

「Hardware Drivers」を探し、「x64 Servers & Workstations」をクリックします。Sun Fire X4170 M2 および X4270 M2 サーバーのサイトには、ファームウェアとドライバのアップデート、および CD-ROM .iso のイメージも用意されています。

関連ドキュメント

次の表に一覧表示する関連マニュアルは、オンラインで利用できます。

(<http://docs.sun.com/app/docs/prod/sf.x4170m2#hic>) および
(<http://docs.sun.com/app/docs/prod/sf.x4270m2#hic>)

タイトル	コンテンツ	パーツ番号	形式
『Sun Fire X4170 M2 および X4270 M2 サーバー製品ノート』	サーバーに関する最新情報	821-1629	PDF HTML
『Sun Fire X4170 M2 and X4270 M2 Servers Getting Started Guide』	サーバーのセットアップに関する基本的なインストール情報	821-0480	PDF 印刷
『Sun Fire X4170 M2 および X4270 M2 サーバー設置マニュアル』	サーバーのセットアップに関する詳細なインストール情報	821-1620	PDF HTML 印刷物
『Linux、仮想マシンソフトウェア、および Oracle Solaris オペレーティングシステムの Sun Fire X4170 M2 および X4270 M2 サーバー設置マニュアル』	Linux、Oracle、VM、VMware、および Oracle Solaris オペレーティングシステムのインストール手順	821-1623	PDF HTML
『Windows オペレーティングシステムの Sun Fire X4170 M2 および X4270 M2 サーバー設置マニュアル』	Windows Server オペレーティングシステムのインストール手順	821-1626	PDF HTML
『Sun Installation Assistant 2.3 through 2.4 User's Guide for x64 Servers』	Sun Installation Assistant を使用して Windows および Linux オペレーティングシステムをインストールする手順	821-0694	PDF HTML
『Sun Fire X4170 M2 Server Service Manual』	Sun Fire X4170 M2 サーバーの保守とアップグレードに関する情報と手順	821-0486	PDF HTML
『Sun Fire X4270 M2 Server Service Manual』	Sun Fire X4270 M2 サーバーの保守とアップグレードに関する情報と手順	821-0488	PDF HTML
『Sun x64 サーバー診断ガイド』	サーバーの診断およびトラブルシューティングに関する情報	820-6750	PDF HTML

タイトル	コンテンツ	パーツ番号	形式
『Sun Server CLI ツールおよび IPMItool 2.0 ユーザーズガイド』	x86 サーバーに共通のアプリケーションおよびユーティリティの使用法に関する情報	821-1600	PDF HTML
Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 マニュアルセット (以前の Sun Integrated Lights Out Manager マニュアルセット)	ILOM 3.0 をサポートするサーバーとおよびサーバーモジュールに共通の ILOM 機能とタスクについてのドキュメント	820-7382	PDF
		820-7370	HTML
		820-7373	
		820-7376 820-6413	
『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 Supplement for Sun Fire X4170 M2 and X4270 M2 Servers』	Sun Fire X4170 M2 および X4270 M2 サーバーに固有の ILOM 3.0 に関する情報	821-1632	PDF HTML
『Sun Fire X4170 M2 and X4270 M2 Servers Safety and Compliance Guide』	サーバーに対するハードウェアの安全性および適合性の情報	821-0490	PDF
Sun ハードウェアシステムの重要な安全性に関する情報	ハードウェアの安全性とコンプライアンスに関するすべての Sun 製ハードウェアシステム向けの多言語情報	821-1590	印刷

これらのドキュメントの一部については、この表の上に記載されている Web サイトで翻訳版が入手可能です。英語版は頻繁に改訂されており、翻訳版よりも最新の情報が記載されています。

マニュアル、サポート、およびトレーニング

機能	URL
マニュアル	http://docs.sun.com
サポート	http://www.sun.com/support/
トレーニング	http://www.sun.com/training/

表記上の規則

書体または記号*	意味	例
AaBbCc123	コマンド名、ファイル名、ディレクトリ名、画面上のコンピュータ出力、コード例。	.login ファイルを編集します。 ls -a を実行します。 % You have mail.
AaBbCc123	ユーザーが入力する文字を、画面上のコンピュータ出力と区別して表します。	% su Password:
<i>AaBbCc123</i>	コマンド行の可変部分。実際の名前や値と置き換えてください。	<i>rm filename</i> と入力します。
『 』	参照する書名を示します。	『Solaris ユーザーマニュアル』
「 」	参照する章、節、または、強調する語を示します。	第 6 章「データの管理」を参照。 この操作ができるのは「スーパーユーザー」だけです。
\	枠で囲まれたコード例で、テキストがページ行幅を超える場合に、継続を示します。	% grep ``#define \ XV_VERSION_STRING'

* 使用しているブラウザにより、これらの設定と異なって表示される場合があります。

ドキュメントのコメント

製品ドキュメントの品質向上のため、お客様のご意見、ご要望をお受けしております。
コメントは下記よりお送りください。

(<http://docs.sun.com>) で「Feedback[+]」リンクをクリックしてください。

ご意見をお寄せいただく際には、下記のタイトルとパーツ番号を記載してください。

『Sun Fire X4170 M2 および X4270 M2 サーバー設置マニュアル』、Part No.
821-1620-10

第1章

Sun Fire X4170 M2 および X4270 M2 サーバーの取り付け準備

この章では、Oracle の Sun Fire X4170 M2 および X4270 M2 サーバーハードウェアについて、サーバーをラックに取り付ける前に必要な情報を説明します。
この章では、次の項目について説明します。

- 1 ページの「必要な工具および機器」
- 2 ページの「サーバー設置作業のチェックリスト」
- 3 ページの「梱包を開く」
- 5 ページの「サーバーの説明」
- 9 ページの「サーバーがサポートする部品」
- 11 ページの「サーバーの仕様」

必要な工具および機器

システムを設置するには、次の工具が必要です。

- プラスのねじ回し (Phillips の 2 番)
- ESD マットおよび接地ストラップ
- 前面パネルのボタンを押すための鉛筆、ペン、または他の先が細い工具

また、次のいずれかのシステムコンソールデバイスも必要です。

- Sun ワークステーション
- ASCII 端末
- 端末サーバー
- 端末サーバーに接続されたパッチパネル

サーバー設置作業のチェックリスト

表 1-1 に、サーバーを正しく設置するための作業手順を示します。

表 1-1 設置作業のチェックリスト

手順	作業の説明	手順については、次を参照してください。
1	サーバーおよびサーバー用に注文したオプションのコンポーネントを梱包から取り出します。	• 3 ページの「梱包を開く」
2	該当する場合は、サーバーをラックに設置する前にオプションのサーバー部品を取り付けます。	• 『Sun Fire X4170 M2 Server Service Manual』 (821-0486) • 『Sun Fire X4270 M2 Server Service Manual』 (821-0488)
3	サーバーをラックに設置します。	• 第 2 章
4	ケーブルをサーバーに接続して、サーバーの電源を入れます。	• 第 3 章
5	ILOM サービスプロセッサを設定します。	• 第 4 章
6	Solaris オペレーティングシステムを注文した場合は、いずれかのストレージドライブ上に出荷時にインストールされている OS のイメージを設定します。 該当する場合、次のいずれかのオペレーティングシステムをインストールします。 <ul style="list-style-type: none">• Oracle Enterprise Linux (OEL)• Red Hat Enterprise Linux (RHEL)• SUSE Linux Enterprise Server (SLES)• Oracle Solaris 10 オペレーティングシステム• Oracle VM (OVM)• VMware ESX/ESXi• Microsoft Windows Server 2008 または 2008 R2 オペレーティングシステム	• 第 5 章 • 第 6 章 • 『Linux、仮想マシンソフトウェア、および Oracle Solaris オペレーティングシステムの Sun Fire X4170 M2 および X4270 M2 サーバー設置マニュアル』 (821-1623) • 『Windows オペレーティングシステムの Sun Fire X4170 M2 および X4270 M2 サーバー設置マニュアル』 (821-1626)

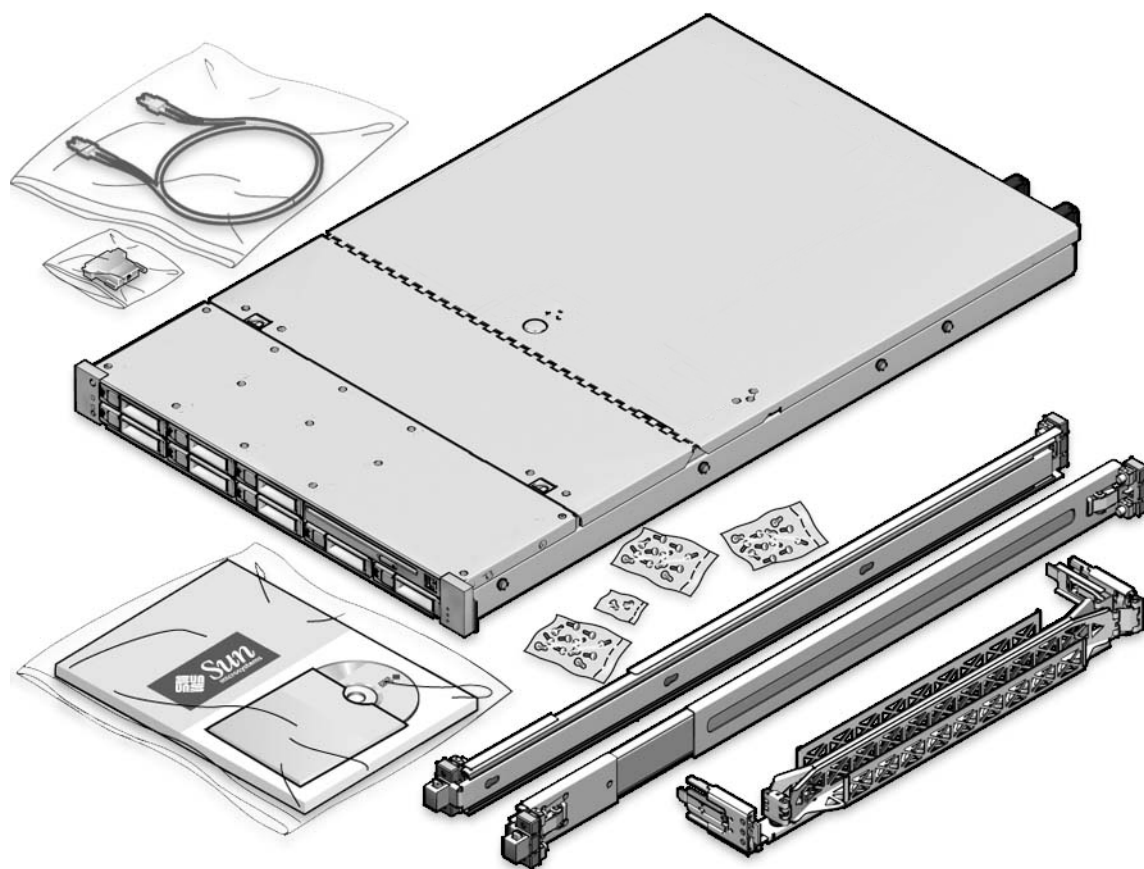
梱包を開く

慎重に発送箱を開けます。

開梱

すべてのサーバー部品の開梱を行います。図 1-1 はパッケージ内容です。

図 1-1 開梱



パッケージ内容のリスト

Sun Fire X4170 M2 および X4270 M2 サーバーに同梱されているアイテムは次のとおりです。

- Sun Fire X4170 M2 または X4270 M2 サーバー
- 電源コード (カントリーキットに別途パッケージ化)
- (オプション) Sun Fire X4170 M2 および X4270 M2 サーバーの次のドキュメントおよびメディアキット
 - Sun Fire X4170 M2 および X4270 M2 サーバー設置マニュアル (このドキュメント)
 - ライセンスおよび安全性に関するドキュメント
 - Tools & Drivers DVD (ドライバと追加のソフトウェアを含む)、Sun Installation Assistant (SIA) CD、および SunVTS CD
- (オプション) ラックレールと設置指示書を含むラックマウントキット

オプション

電源ケーブルは、ほかのアイテムとは別にパッケージ化されています。

標準のサーバーコンポーネントは工場で組み付けられています。ただし、増設メモリーや PCI Express カードなどの別途注文されたオプションは別々に出荷されます。可能な場合は、サーバーをラックに設置する前にオプションのコンポーネントを取り付けます。サーバーオプションの取り付け手順については、『Sun Fire X4170 M2 Server Service Manual』 (821-0486) または『Sun Fire X4270 M2 Server Service Manual』 (821-0488) を参照してください。

静電気放電に関する注意事項

電子機器は静電気により損傷する可能性があります。サーバーの設置またはサービス時は、接地された静電気防止リストストラップ、フットストラップ、または同様の安全器具を使用して、静電気による損傷 (ESD) を防止します。



注意 – 電子部品が静電気によって損傷すると、システムが永久に使用できなくなるか、Sun の保守技術者による修復が必要になることがあります。電子部品を静電気による損傷から保護するため、静電気防止用マット、静電気防止袋、使い捨て静電気防止用マットなどの静電気防止面に部品を置いてください。システム部品で作業するときは、シャーシの金属面に接続された静電気防止アースストラップを着用します。

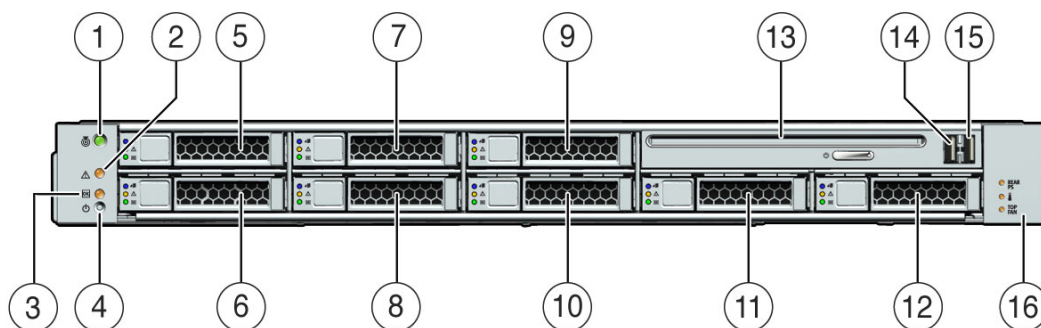
サーバーの説明

このセクションでは、Sun Fire X4170 M2 および X4270 M2 サーバーの前面と背面を示します。

フロントパネルの機構

図 1-2 では Sun Fire X4170 M2 サーバーのフロントパネルを示し、その部品を説明します。

図 1-2 Sun Fire X4170 M2 サーバー前面パネル



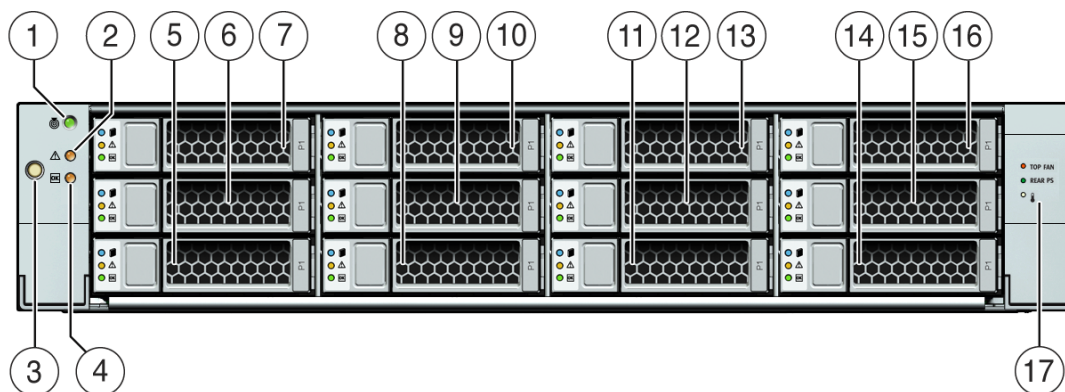
図の説明

- | | |
|-------------------------|--|
| 1 ロケータ LED/ロケータボタン: 白色 | 9 ハードディスクドライブ 5 (オプション) |
| 2 保守要求 LED: オレンジ色 | 10 ハードディスクドライブ 4 (オプション) |
| 3 電源/OK LED: 緑色 | 11 ハードディスクドライブ 6 (オプション) |
| 4 電源ボタン | 12 ハードディスクドライブ 7 (オプション) |
| 5 ハードディスクドライブ 1 (オプション) | 13 DVD ドライブ (オプション) |
| 6 ハードディスクドライブ 0 (オプション) | 14 USB 2.0 コネクタ |
| 7 ハードディスクドライブ 3 (オプション) | 15 USB 2.0 コネクタ |
| 8 ハードディスクドライブ 2 (オプション) | 16 電源装置保守要求 LED: オレンジ色
システム温度超過 LED: オレンジ色
ファンモジュール保守要求 LED: オレンジ色 |

図 1-3 では Sun Fire X4270 M2 サーバーのフロントパネルを示し、その部品を説明します。

注 – Sun Fire X4270 M2 サーバーは、任意で 12 台または 24 台のハードディスクドライブを使用して構成できます。図 1-3 に 12 台のハードディスクドライブ構成を示します。

図 1-3 Sun Fire X4270 M2 サーバー前面パネル



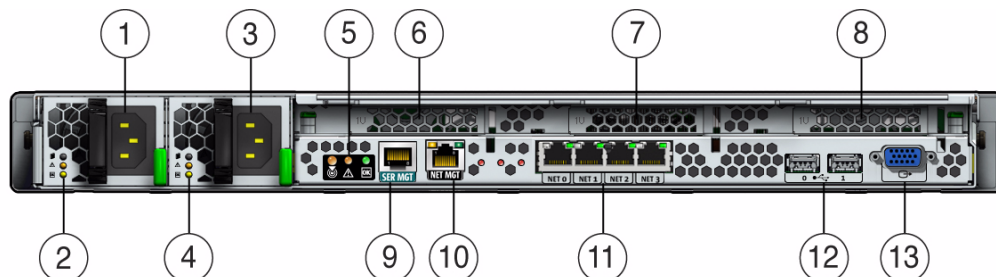
図の説明

- | | |
|-------------------------|--|
| 1 ロケータ LED/ロケータボタン: 白色 | 10 ハードディスクドライブ 5 (オプション) |
| 2 保守要求 LED: オレンジ色 | 11 ハードディスクドライブ 6 (オプション) |
| 3 電源ボタン | 12 ハードディスクドライブ 7 (オプション) |
| 4 電源/OK LED: 緑色 | 13 ハードディスクドライブ 8 (オプション) |
| 5 ハードディスクドライブ 0 (オプション) | 14 ハードディスクドライブ 9 (オプション) |
| 6 ハードディスクドライブ 1 (オプション) | 15 ハードディスクドライブ 10 (オプション) |
| 7 ハードディスクドライブ 2 (オプション) | 16 ハードディスクドライブ 11 (オプション) |
| 8 ハードディスクドライブ 3 (オプション) | 17 ファンモジュール保守要求 LED: オレンジ色
電源装置保守要求 LED: オレンジ色
システム温度超過 LED: オレンジ色 |
| 9 ハードディスクドライブ 4 (オプション) | |

背面パネル

図 1-4 では Sun Fire X4170 M2 サーバーの背面パネルを示し、その部品を説明します。

図 1-4 Sun Fire X4170 M2 サーバー背面パネル

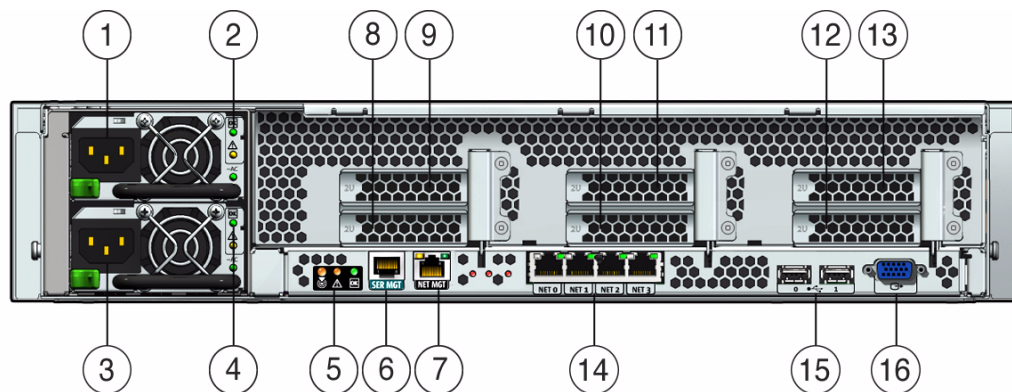


図の説明

- | | |
|---|---|
| 1 電源ユニット 0 コネクタ | 8 PCI Express モジュールスロット (2) |
| 2 電源ユニット 0 状態インジケータ LED:
電源 OK: 緑色
電源故障: オレンジ色
AC OK: 緑色 | 9 シリアル管理 (SER MGT)/RJ-45 シリアル
ポート |
| 3 電源ユニット 1 コネクタ | 10 サービスプロセッサ (Service processor、SP)
ネットワーク管理 (NET MGT) ポート |
| 4 電源ユニット 1 状態インジケータ LED:
電源 OK: 緑色
電源故障: オレンジ色
AC OK: 緑色 | 11 ギガビット Ethernet ポート NET 0、1、2、3 |
| 5 システム状態 LED:
電源: 緑色
注意: オレンジ色
位置特定: 白色 | 12 USB 2.0 ポート (0、1) |
| 6 PCI Express モジュールスロット (0) | 13 HD15 ビデオコネクタ (アナログ VGA) |
| 7 PCI Express モジュールスロット (1) | |

図 1-5 では Sun Fire X4270 M2 サーバーの背面パネルを示し、その部品を説明します。

図 1-5 Sun Fire X4270 M2 サーバー背面パネル



図の説明

- | | |
|---|-----------------------------------|
| 1 電源ユニット 1 コネクタ | 9 PCI Express モジュールスロット (3) |
| 2 電源ユニット 1 状態インジケータ LED:
電源 OK: 緑色
電源故障: オレンジ色
AC OK: 緑色 | 10 PCI Express モジュールスロット (1) |
| 3 電源ユニット 0 コネクタ | 11 PCI Express モジュールスロット (4) |
| 4 電源ユニット 0 状態インジケータ LED:
電源 OK: 緑色
電源故障: オレンジ色
AC OK: 緑色 | 12 PCI Express モジュールスロット (2) |
| 5 システム状態 LED:
電源: 緑色
注意: オレンジ色
位置特定: 白色 | 13 PCI Express モジュールスロット (5) |
| 6 シリアル管理 (SER MGT)/RJ-45 シリアル
ポート | 14 ギガビット Ethernet ポート NET 0、1、2、3 |
| 7 サービスプロセッサ (Service Processor、SP)
ネットワーク管理 (NET MGT) ポート | 15 USB 2.0 ポート (0、1) |
| 8 PCI Express モジュールスロット (0) | 16 HD15 ビデオコネクタ (アナログ VGA) |

サーバーがサポートする部品

この節では、Sun Fire X4170 M2 および X4270 M2 サーバーがサポートする部品について説明します。

Sun Fire X4170 M2 サーバーがサポートする部品

次の表で、Sun Fire X4170 M2 サーバーの部品と機能を説明します。

表 1-2 Sun Fire X4170 M2 サーバーのコンポーネント

コンポーネント	Sun Fire X4170 M2 サーバー
CPU	各プロセッサに 3 つの統合 DDR3 メモリーコントローラを搭載する 1 個または 2 個のクアッドコア (2.4 GHz) または 6 コア (2.26 GHz または 2.93 GHz) プロセッサ。 次の CPU がサポートされています。 <ul style="list-style-type: none">• 95 ワット• 80 ワット• 60 ワット
メモリー	最大 18 個の DDR3 DIMM および最大 144 GB のメモリーに対してプロセッサごとに 9 個の DDR3 DIMM
ストレージデバイス	<ul style="list-style-type: none">• 最大 6 個の 2.5 インチ SATA ハードディスクドライブ (Hard Drive Device、HDD) または 4 個の半導体ドライブ (Solid-State Drive、SSD)• オプションのハードウェア RAID コントローラを搭載した最大 8 個の 2.5 インチ SAS/SATA HDD または 4 個の SSD• DVD-RW ドライブ• 最大 2 個の 24 GB フラッシュメモリーモジュール (FMOD) <p>注 — FMODを使用してサーバーを構成する場合は、オプションのエネルギー貯蔵モジュール (ESM) が必要です。ESM は、予期しない停電時にバックアップ電源を約 5 秒間提供します。</p>
USB ポート	前面 2 個、背面 2 個、および内部 1 個 (USB サムドライブ用)
PCI Express 2.0 I/O スロット	3 個のロープロファイル PCIe Gen2 スロット (1 個は x16、2 個は x8)
PCI Express I/O カード	顧客が注文できるオプションの I/O カードのリストについては、次の Web サイトを参照してください。 (http://www-ak.sun.com/servers/x64/x4170/optioncards.jsp)
Ethernet ポート	背面パネルに 4 個のギガビット Ethernet (GbE) ポート 各ネットワークインタフェースカード (Network Interface Card、NIC) は、I/O Acceleration Technology 3 (IOAT3) をサポート

表 1-2 Sun Fire X4170 M2 サーバーのコンポーネント (続き)

コンポーネント	Sun Fire X4170 M2 サーバー
サービスプロセッサ (SP)	<p>SP サブシステムを使用</p> <p>業界標準の IPMI 機能セットをサポートする Baseboard Management Controller (BMC) を含む</p> <p>リモート KVMs over IP をサポート</p> <p>シリアルポートを含む</p> <p>専用の 10/100BaseT 管理ポートおよびオプションでホストの GbE ポート (サイドバンド管理) のいずれかを使用して、SP への Ethernet アクセスをサポート</p>
電源装置	最大 2 個までのホットプラグ対応電源装置
冷却ファン	冗長ホットプラグ対応ファン
管理ソフトウェア	Oracle Integrated Lights Out Manager 3.0

Sun Fire X4270 M2 サーバーがサポートする部品

次の表で、Sun Fire X4270 M2 サーバーの部品と機能を説明します。

表 1-3 Sun Fire X4270 M2 サーバーの部品と機能

コンポーネント	Sun Fire X4270 M2 サーバー
CPU	<p>各プロセッサに 3 つの統合 DDR3 メモリーコントローラを搭載する 1 個または 2 個のクアッドコア (2.4 GHz) または 6 コア (2.93 GHz または 3.33 GHz) プロセッサ。次の CPU がサポートされています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 130 ワット • 95 ワット • 80 ワット
メモリー	最大 18 個の DDR3 DIMM および最大 144 GB のメモリーに対してプロセッサごとに 9 個の DDR3 DIMM
ストレージデバイス	<ul style="list-style-type: none"> • オプションのハードウェア RAID コントローラを搭載した最大 12 個の 3.5 インチ SAS/SATA HDD • オプションのハードウェア RAID コントローラを搭載した最大 24 個の 2.5 インチ SAS/SATA HDD • 最大 2 個の 24 GB フラッシュメモリーモジュール (FMOD) • 最大 2 個のオプションの背面にある (PCIe スロット 2 および 5 を使用) 2.5 インチ SATA HDD。これらのディスクは起動専用です。
USB ポート	前面 2 個、背面 2 個、および内部 1 個 (USB サムドライブ用)
PCI Express 2.0 I/O スロット	6 個の x8 ロープロファイル PCIe Gen2 スロット

表 1-3 Sun Fire X4270 M2 サーバーの部品と機能 (続き)

コンポーネント	Sun Fire X4270 M2 サーバー
PCI Express I/O カード	顧客が注文できるオプションの I/O カードのリストについては、次の Web サイトを参照してください。 (http://www-ak.sun.com/servers/x64/x4270/optioncards.jsp)
Ethernet ポート	背面パネルに 4 個のギガビット Ethernet (GbE) ポート 各ネットワークインタフェースカード (Network Interface Card、NIC) は、I/O Acceleration Technology 3 (IOAT3) をサポート
サービスプロセッサ (SP)	SP サブシステムを使用 業界標準の IPMI 機能セットをサポートする Baseboard Management Controller (BMC) を含む リモート KVMs over IP をサポート シリアルポートを含む 専用の 10/100BaseT 管理ポートおよびオプションでホストの GbE ポート (サイドバンド管理) のいずれかを使用して、SP への Ethernet アクセスをサポート
電源装置	最大 2 個までのホットプラグ対応電源装置
冷却ファン	冗長ホットプラグ対応ファン
管理ソフトウェア	Oracle Integrated Lights Out Manager 3.0

サーバーの仕様

物理仕様

表 1-4 に、Sun Fire X4170 M2 および X4270 M2 サーバーの物理仕様を一覧表示します。

表 1-4 サーバーの物理仕様

パラメータ	Sun Fire X4170 M2 サーバー	Sun Fire X4270 M2 サーバー
高さ	1.71 インチ (43.43 mm)	3.43 インチ (87.12 m)
幅	16.75 インチ (425.45 m)	16.75 インチ (425.45 m)
奥行	27.0 インチ (685.8 m)	30.0 インチ (762.0 m)
重量	36 ポンド (16.36 kg)	65 ポンド (29.54 kg)

電気仕様

表 1-5 に、Sun Fire X4170 M2 および X4270 M2 サーバーの電気仕様を一覧表示します。

注 – 次の表に表示されている電力消費数は、これらのサーバーで使用される電源装置の最大定格出力数です。これらの数値は、システムの実際の消費電力の定格ではありません。消費電力の最新情報は、Web サイト (<http://www.sun.com/powercalculators>) で Sun Fire X4170 M2 および X4270 M2 サーバーの電力計算を参照してください

表 1-5 サーバーの電気仕様

パラメータ	値
Sun Fire X4170 M2 サーバー	
入力	
周波数	50/60 Hz
公称電圧範囲	100-120/200-240 VAC
最大電流 AC RMS	最大 9.0 アンペア
AC 動作範囲	90-264 VAC
出力	
3.3 VDC STBY	3.6A
+12 VDC	62.3 A
電力消費	
最大電力消費	873 W
最大出熱	2977 BTU/時
定格電圧・電流	891 VA @ 240 VAC、0.98 P.F.
Sun Fire X4270 M2 サーバー	
入力	
周波数	50/60 Hz
公称電圧範囲	100 VAC、110-127 VAC、200-240 VAC
最大電流 AC RMS	最大 13.0 アンペア
AC 動作範囲	90-264 VAC
出力	
3.3 VDC STBY	3.0 A

表 1-5 サーバーの電気仕様 (続き)

パラメータ	値
+12 VDC	86.7 A
電力消費	
最大電力消費	1235.3 W
最大出熱	4212 BTU/時
定格電圧・電流	1261 VA @ 240 VAC、0.98 P.F.

環境要件

表 1-6 に、Sun Fire X4170 M2 および X4270 M2 サーバーの環境要件を一覧表示します。

表 1-6 サーバー環境要件

パラメータ	値
動作温度 (単一のラック以外のシステム)	5 ～ 35° C (41 ～ 95 ° F)
非動作時温度 (単一のラック以外のシステム)	-40 ～ 70° C (-40 ～ 158° F)
動作湿度 (単一のラック以外のシステム)	10 ～ 90% の相対湿度、結露なし
非動作時湿度 (単一のラック以外のシステム)	最大 93% の相対湿度、結露なし
高度 (動作時) (単一のラック以外のシステム)	<ul style="list-style-type: none"> • Sun Fire X4170 M2 サーバーの場合: 最大 3,000 m、最大周囲温度は 900 m を超えると 300 m ごとに摂氏 1 度ずつ下がる • Sun Fire X4270 M2 サーバーの場合: 最大 3,048 m、最大周囲温度は 900 m を超えると 300 m ごとに摂氏 1 度ずつ下がる
高度 (非動作時) (単一のラック以外のシステム)	最大 12,000 m

第2章

スライドレールによるサーバーのラックへの取り付け

この章では、ラックマウントキットのレール構成部品を使用して、サーバーをラック内に取り付ける方法について説明します。レール構成部品を購入した場合は、この手順を実行します。

この章では、次の項目について説明します。

- 16 ページの「取り付けを開始する前に」
- 17 ページの「ラックの互換性」
- 18 ページの「スライドレールの分解」
- 20 ページの「サーバーへの取り付けブラケットの取り付け」
- 22 ページの「ラックへのスライドレール構成部品の取り付け」
- 26 ページの「スライドレール構成部品へのサーバーの設置」
- 29 ページの「Sun Fire X4170 M2 サーバーへのケーブル管理アームの取り付け」
- 36 ページの「Sun Fire X4270 M2 サーバーへのケーブル管理アームの取り付け」
- 43 ページの「スライドレールと CMA の動作の確認」

注 – 本書では、用語「ラック」とはオープンラックまたはクローズキャビネットを意味します。

取り付けを開始する前に

ラック内へのサーバーの取り付けを始める前に、次の概要を読み、上部カバーのサービスラベルを確認してください。

サーバー設置プロセスの概要

オプションのスライドレールとケーブル管理アームを使用してサーバーを 4 ポストラック内に設置するには、次の節を参照して、この順序で作業を実行します。

1. [17 ページの「ラックの互換性」](#)
2. [18 ページの「スライドレールの分解」](#)
3. [20 ページの「サーバーへの取り付けブラケットの取り付け」](#)
4. [29 ページの「Sun Fire X4170 M2 サーバーへのケーブル管理アームの取り付け」](#)
または [36 ページの「Sun Fire X4270 M2 サーバーへのケーブル管理アームの取り付け」](#)
5. [43 ページの「スライドレールと CMA の動作の確認」](#)
6. [45 ページの「ケーブルの接続」](#)

レール構成部品

このサーバーのラックマウントキットには、工具不要のレール構成部品またはボルト止めレール構成部品が付属されている可能性があります。本章では、両方のレール構成部品を使用するの手順について説明しています。

サービスラベル

オプションのスライドレールとケーブル管理アームを使用して、サーバーを 4 ポストラックに取り付ける手順については、サーバーの上部カバーのサービスラベルを参照してください。サービスラベルには、工具不要のレール構成部品を使用した場合とボルト止めレール構成部品を使用した場合の両方の手順が示されています。

ラックの互換性

使用するラックがオプションのスライドレールおよびケーブル管理アーム (CMA) と互換性があることを確認します。オプションのスライドレールは、次の仕様を満たすさまざまな標準ラックに対応しています。

表 2-1 ラックの互換性

アイテム	要件
構造	前後左右で固定する形式の 4 ポストラック。2 ポストのラックにはマウントできません。
ラックの横方向の開口部とユニットの縦方向のピッチ	ANSI/EIA 310-D-1992 または IEC 60927 規格に適合すること。
前側取り付け面と後ろ側取り付け面の距離	610 - 915 mm (24 - 36 インチ)。
前側取り付け面の前面の隙間	キャビネット前面ドアまでの距離が 25.4 mm (1 インチ) 以上あること。
前側取り付け面の背後の隙間	ケーブル管理アームを使用する場合は、キャビネット後面ドアまで 800 mm (31.5 インチ) 以上の間隔があること。ケーブル管理アームを使用しない場合は 700 mm (27.5 インチ) 以上であること。
前側取り付け面と後ろ側取り付け面の幅	構造的支柱とケーブルの溝の距離が 456 mm (18 インチ) 以上であること。
サーバーの寸法	奥行き: (PSU ハンドルを含まない長さ): 685.80 mm (27.0 インチ) 幅: (耳を含まない長さ): 425.45 mm (16.75 インチ) 高さ: Sun Fire X4170 M2 サーバー: 43.43 mm (1.71 インチ)、Sun Fire X4270 M2 サーバー: 87.12 mm (3.43 インチ)



注意 – 上方が重くなり転倒することがないように、機器は必ずラックの最下段から上へ順次搭載してください。転倒防止機構を装備しているラックであれば、サーバー取り付け時に活用してください。



注意 – 動作時周辺温度の上昇: 密閉されたラックアセンブリまたはマルチユニットのラックアセンブリにサーバーを設置している場合、ラック環境の動作時周辺温度が室内の周辺温度より高くなる場合があります。したがって、サーバーに対して指定されている最大周辺温度 (Tma) に適した環境に装置を設置することを検討するようにしてください。サーバーの環境要件については、[13 ページの「環境要件」](#)を参照してください。



注意 – 通気の減少: 装置の安全な動作に必要な通気が妨げられないように、装置をラック内に設置するようにしてください。



注意 – 装置の配置: 不均等な装置の配置によって危険な状態が発生しないよう、装置をラック内に取り付けるようにしてください。



注意 – 回路の過負荷: 電源回路への装置の接続、および回路の過負荷によって発生する可能性のある過電流対策や電源配線についても考慮するようにしてください。これについて対処するときは、装置のネームプレートに表示された定格電力に従った配慮が必要です。



注意 – 確実なアース: ラックマウント型装置の確実なアースが保たれるようにしてください。分岐回路への直接接続以外の電源接続 (テーブルタップの使用など) の場合は、特に注意を払うようにしてください。



注意 – スライドレールに搭載した機器を柵または作業スペースとして使用しないでください。

スライドレールの分解

設置前に次のいずれかの手順を完了させます。

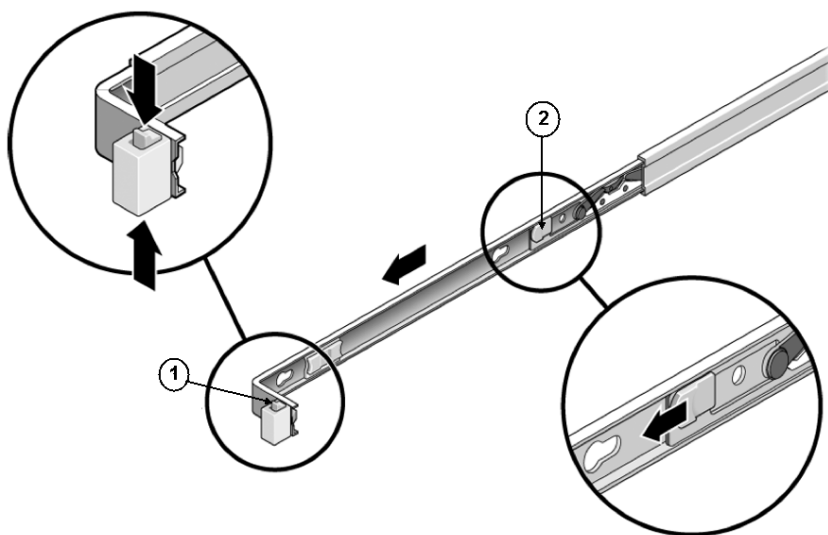
- [19 ページの「ボルト止めスライドレールの分解」](#)
- [20 ページの「工具不要スライドレールの分解」](#)

▼ ボルト止めスライドレールの分解

ボルト止めスライドレール構成部品から固定部品を取り外すには、次の手順に従います。

1. スライドレールを開梱します。
2. スライドレール構成部品の前面にあるスライドレールロックを特定します (図 2-1)。
3. ロックの上部と下部のタブを押しながら、固定部品がストップに達するまでスライドレールから引き出します (図 2-1)。
4. 取り付けブラケットリリースボタンを取り付けブラケットの前側に押しながら (図 2-1)、取り付けブラケットをスライドレール構成部品から外します。
5. すべてのスライドレール構成部品で上記の手順を繰り返します。

図 2-1 設置前のボルト止めスライドレールの分解



図の説明

- | | |
|---|-------------|
| 1 | スライドレールロック |
| 2 | 固定部品リリースボタン |

▼ 工具不要スライドレールの分解

工具不要スライドレール構成部品から固定部品を取り外すには、次の手順に従います。

- 工具不要スライドレール構成部品から固定部品を取り外す手順については、ラックマウントキットに付属の設置シートを参照してください。

サーバーへの取り付けブラケットの取り付け

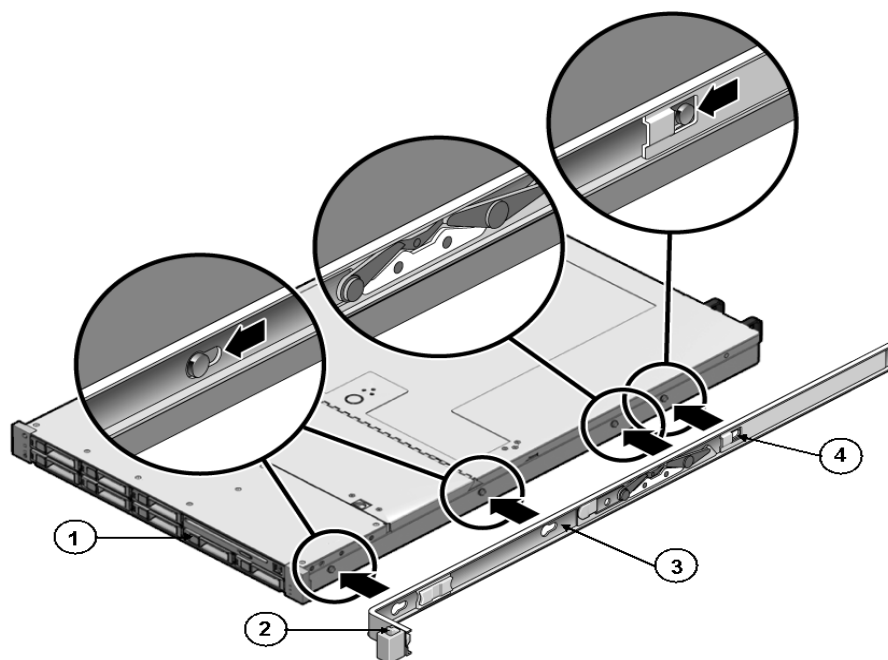
サーバーをラックに搭載する前に、固定部品をサーバーに取り付けます。

▼ 固定部品の取り付け

固定部品をサーバーの側面に取り付けるには、次の手順に従います。

1. スライドレールロックがサーバーの前面に来て、固定部品の 4 つのキー溝付きの開口部がシャーシの側面にある 4 つの位置決め用ピンと整列するように、シャーシに対して固定部品を位置決めします (図 2-2)。

図 2-2 取り付けブラケットとサーバーシャーシとの整列



図の説明

- 1 シャーシ前面
- 2 スライドレールロック
- 3 取り付けブラケット
- 4 取り付けブラケットクリップ

2. 4つの位置決め用ピンの頭を固定部品の4つのキー付きの開口部に挿入し、固定部品を、クリップが「カチッ」と音がして固定されるまで、シャーシの前面に向けて引っ張ります (図 2-2)。
3. 背面の位置決め用ピンが取り付けブラケットのクリップにかみ合っていることを確認します (図 2-2)。
4. 上記の手順を繰り返してサーバーのもう片方のブラケットを取り付けます。

ラックへのスライドレール構成部品の取り付け

次のいずれかの手順を完了させて、スライドレール構成部品をラックに取り付けます。

- [22 ページの「ボルト止めスライドレール構成部品の取り付け」](#)
- [25 ページの「工具不要スライドレール構成部品の取り付け」](#)

▼ ボルト止めスライドレール構成部品の取り付け

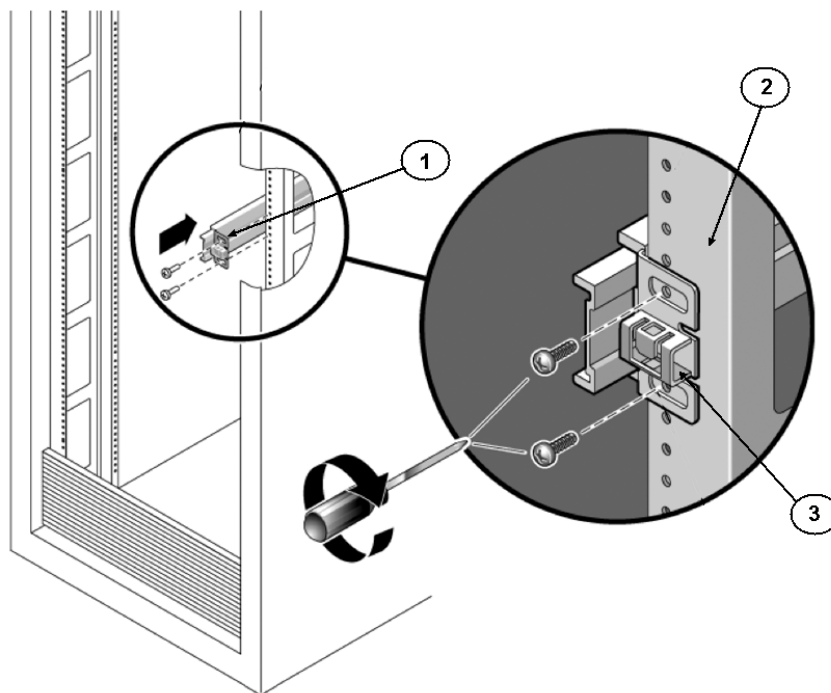
ボルト止めスライドレール構成部品をラックに取り付けるには、次の手順に従います。

1. スライドレール構成部品の各端部のブラケットが前面と背面のラックのポストの外側にくるようにスライドレール構成部品を位置決めします (図 2-3)。
2. スライドレール構成部品をラックのポストに取り付けます。ただし、ネジは完全に締め付けしないでください。

次のいずれかの方法を使用してスライドレールを取り付けます。ラックの種類に応じて使用する方法は異なります。

- ラックのポストにネジ穴があるラックの場合は、ネジがメートルネジかインチネジかを確認し、正しい取り付けネジをスライドレールブラケットを通してネジ穴に取り付けます。
- ラックにネジ穴がない場合は、スライドレールブラケットとラックのポストの両方の穴に取り付けネジを通してケージナットで締め付けます。

図 2-3 ラックのポストへのスライドレール構成部品の取り付け



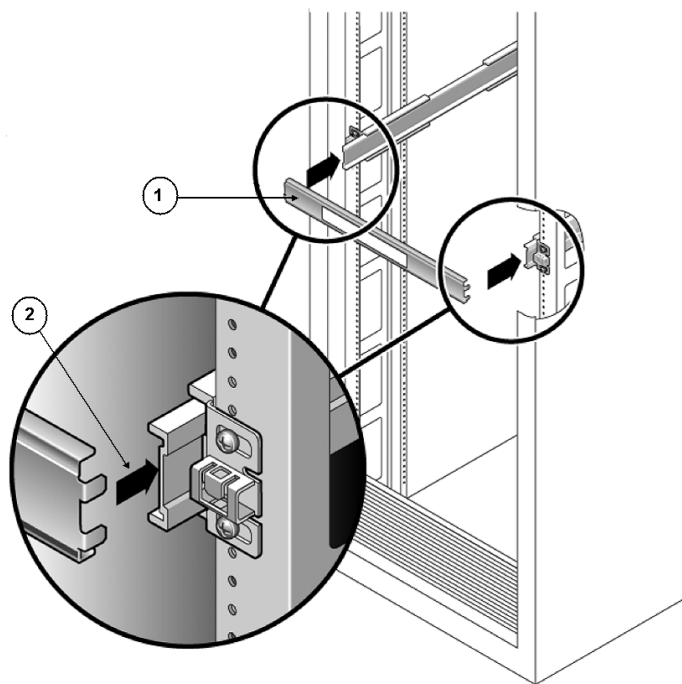
図の説明

-
- | | |
|---|------------------------------|
| 1 | ラックの支柱の外側の |
| 2 | ラックのポスト |
| 3 | ラックのポストの外側のスライドレール構成部品のブラケット |
-

3. 手順 1 と手順 2 を繰り返して、残りのスライドレール構成部品を取り付けます。

4. ラックの前面からスペーサを使用して、レールを正しい幅に設定します (図 2-4)。

図 2-4 レール幅の設定



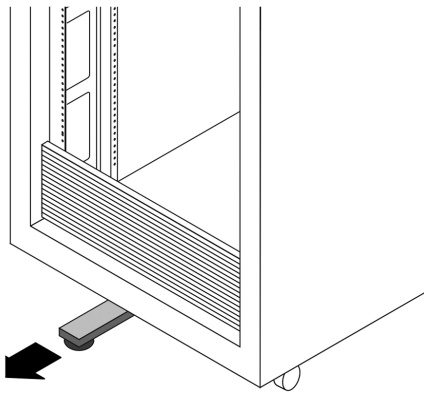
図の説明

-
- | | |
|---|----------------|
| 1 | レール幅スペーサ |
| 2 | スペーサのレールへの取り付け |
-

5. 両方のブラケットのネジを締め付けます (図 2-4)。
6. スペーサを取り外し、レールがラックにしっかりと取り付けられていることを確認します。
7. 手順 4 から手順 6 を繰り返して、ラック背面にスライドレール構成部品を取り付けます。

8. 利用可能な場合は、ラックの下部の転倒防止バーを伸ばします (図 2-5)。

図 2-5 転倒防止バーの引き出し



注意 – ラックに転倒防止バーがない場合、ラックが転倒する可能性があります。

▼ 工具不要スライドレール構成部品の取り付け

工具不要スライドレール構成部品をラックに取り付けるには、次の手順に従います。

- 工具不要スライドレール構成部品をラックに取り付ける手順については、ラックマウントキットに付属の設置シートを参照してください。

スライドレール構成部品へのサーバーの設置

固定部品を取り付けたサーバーシャーシを、ラックに取り付けられているスライドレール構成部品に設置するには、ここで説明する手順に従います。



注意 – サーバーは重いので、この手順では少なくとも 2 名の作業者がが必要です。この手順を 1 人で実行すると、機器が損傷したり、けがをする可能性があります。

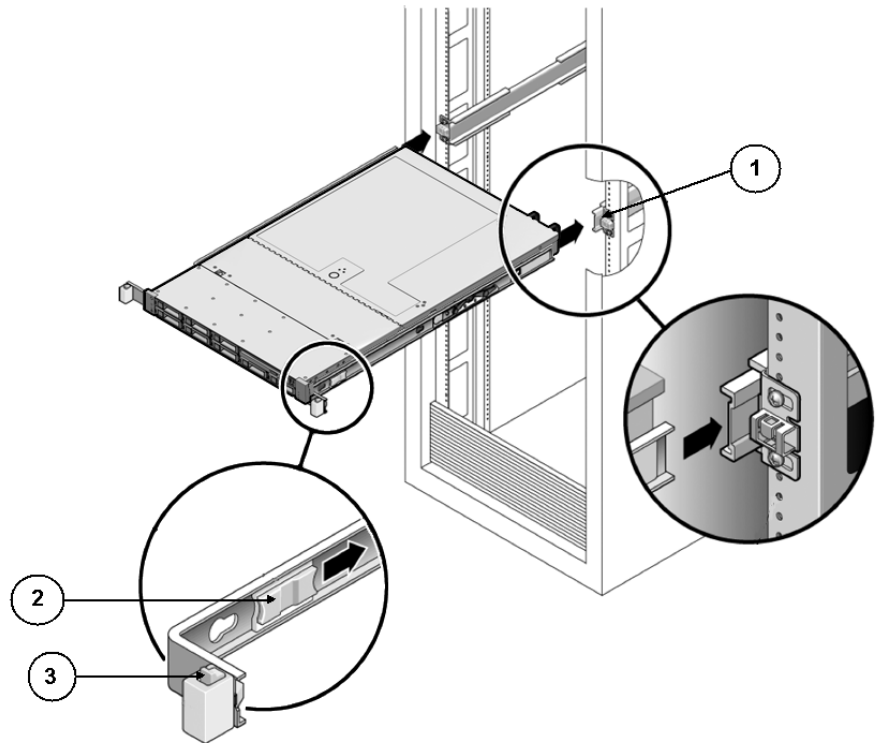


注意 – 上方が重くなり転倒することがないように、機器は必ずラックの最下段から上へ順次搭載してください。転倒防止バーを伸ばして、機器の設置中にラックが転倒しないようにしてください。

▼ スライドレール構成部品へのサーバーの設置

1. スライドレールをラックのスライドレール構成部品に可能な限り奥まで押し込みます。
2. 固定部品の後端が、ラックに取り付けられているスライドレール構成部品と整列するようにサーバーを持ち上げます (図 2-6)。
3. 取り付けブラケットをスライドレールに挿入し、取り付けブラケットがスライドレールのストップに接触するまでサーバーをラック内に押し込みます (約 30 cm (12 インチ))。

図 2-6 固定部品を取り付けたサーバーのスライドレールへの挿入

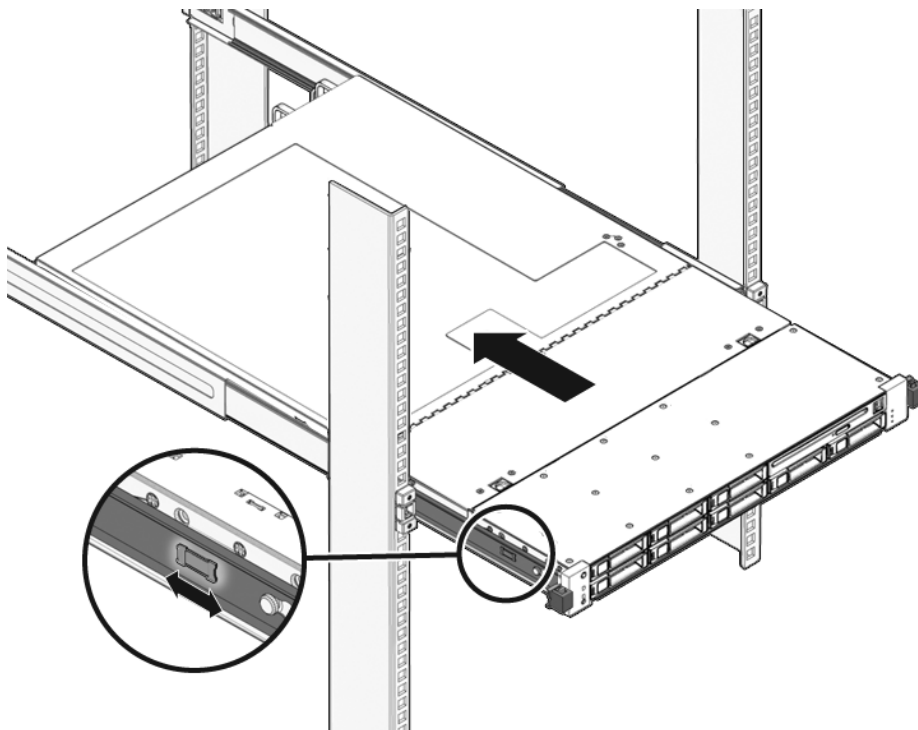


図の説明

- 1 固定部品をスライドレールに挿入
- 2 スライドレールリリースボタン
- 3 スライドレールロック

4. 両方の固定部品のスライドレールリリースボタンを同時に押しながら、サーバーをラック内に押し込みます (図 2-6)。固定部品の前面のスライドレールロックがスライドレール構成部品にかみ合うまで押し込みます (図 2-7)。
かみ合うと、「カチッ」と音がします。

図 2-7 ラックへのサーバーの挿入



注意 – サーバーがラックにしっかりと取り付けられていること、およびスライドレールロックが固定部品にかみ合っていることを確認してから次の手順に進みます。

Sun Fire X4170 M2 サーバーへのケーブル管理アームの取り付け

ケーブル管理アーム (Cable Management Arm、CMA) はオプションの構成部品であり、ラック内のサーバーケーブルの配線に使用できます。

▼ ケーブル管理アームの取り付け

オプションの CMA を取り付けするには、ここで説明している手順に従います。

1. CMA の部品を開梱します。
2. CMA を機器ラックの背面に移動し、サーバーの背後に十分な作業スペースがあることを確認します。

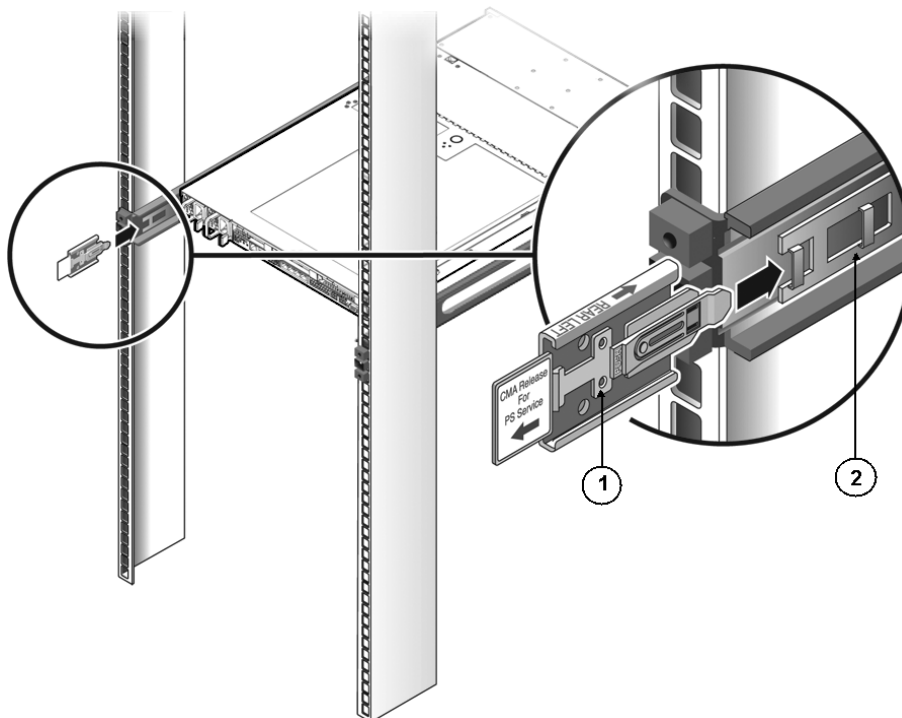
注 – この手順の「左」と「右」は、機器ラックの背面を見たときの左と右を示します。

3. テープを剥がして CMA の部品を分けます。

CMA レール拡張部品は、CMA アームにテープで固定されている可能性があります。

4. CMA レール拡張部品を、「カチッ」と音がして固定されるまで、左側スライドレールに差し込みます (図 2-8)。

図 2-8 左側スライドレール後部への CMA レール拡張部品の挿入

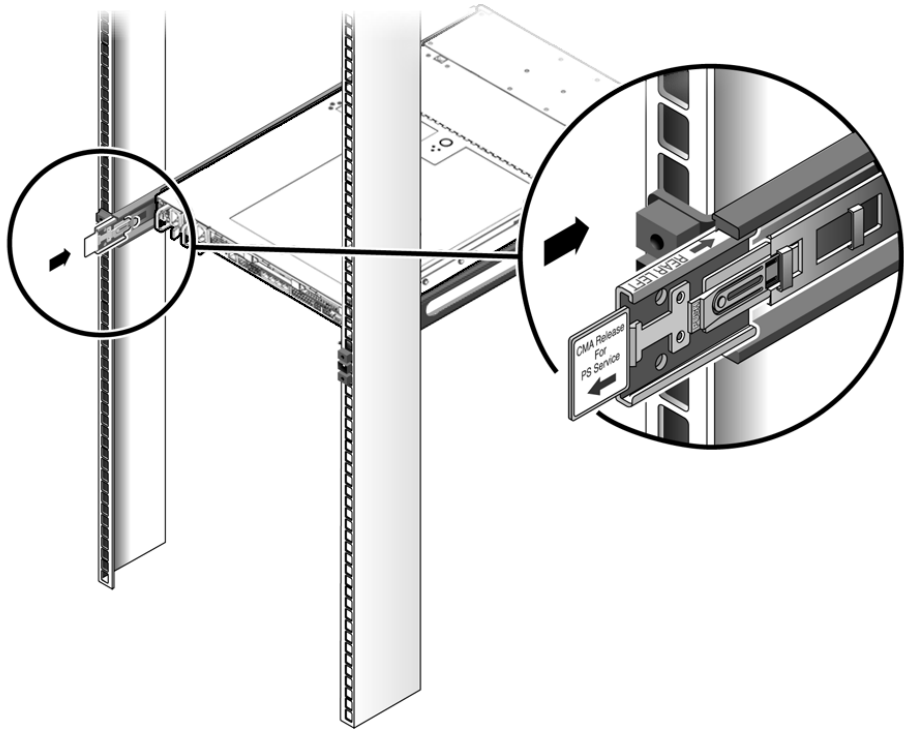


図の説明

-
- | | |
|---|-------------|
| 1 | CMA レール拡張部品 |
| 2 | 左側スライドレール |
-

5. CMA レール拡張部品がスライドレールにかみ合っていることを確認します (図 2-9)。

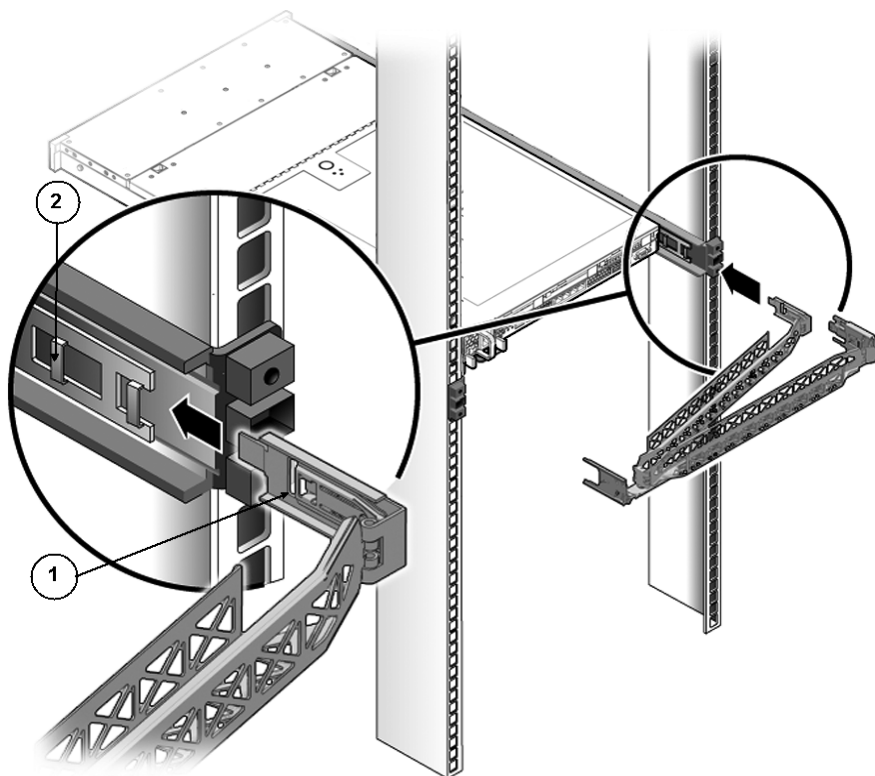
図 2-9 CMA レール拡張部品と左側スライドレールのかみ合わせ



注 – 残りの設置作業は、CMA を支えながら行ってください。アームは、3つの取り付け箇所すべてに固定されるまで、自重がかかるように吊り下げたりしないでください。

6. CMA の固定部品コネクタを、「カチッ」と音がして固定されるまで、右側のスライドレールに差し込みます (図 2-10)。

図 2-10 右側スライドレール後部への CMA 取り付けブラケットの挿入

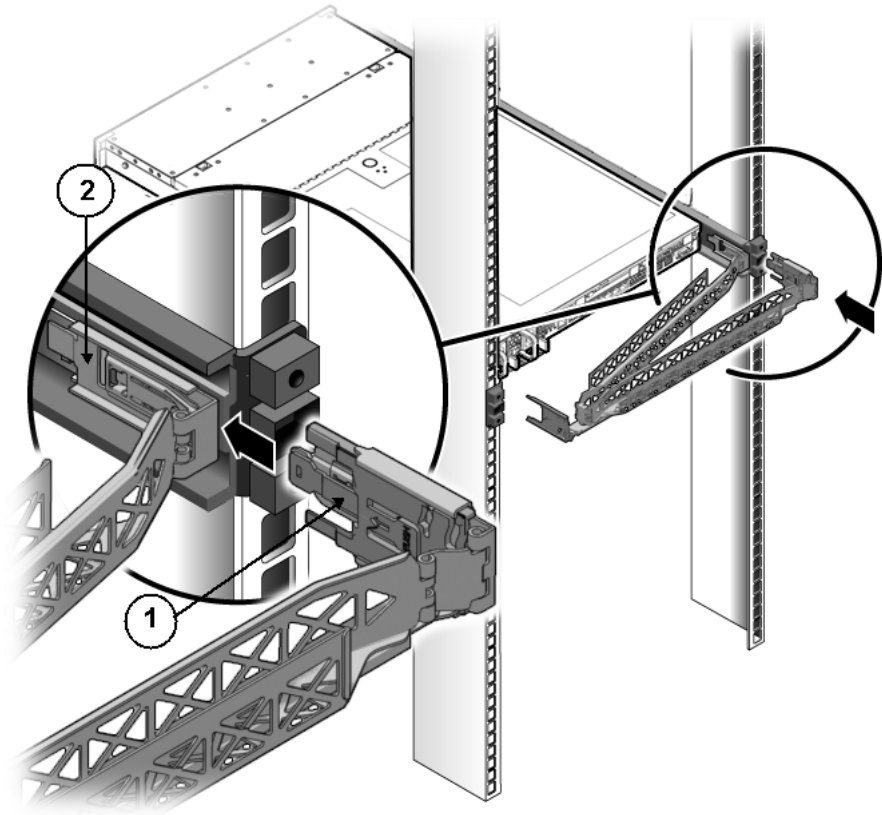


図の説明

-
- | | |
|---|-----------|
| 1 | CMA 固定部品 |
| 2 | 右側スライドレール |
-

7. 右側の CMA スライドレールコネクタを、「カチッ」と音がして固定されるまで、右側スライドレール構成部品に差し込みます (図 2-11)。

図 2-11 右側スライドレール後部への CMA スライドレールコネクタの挿入

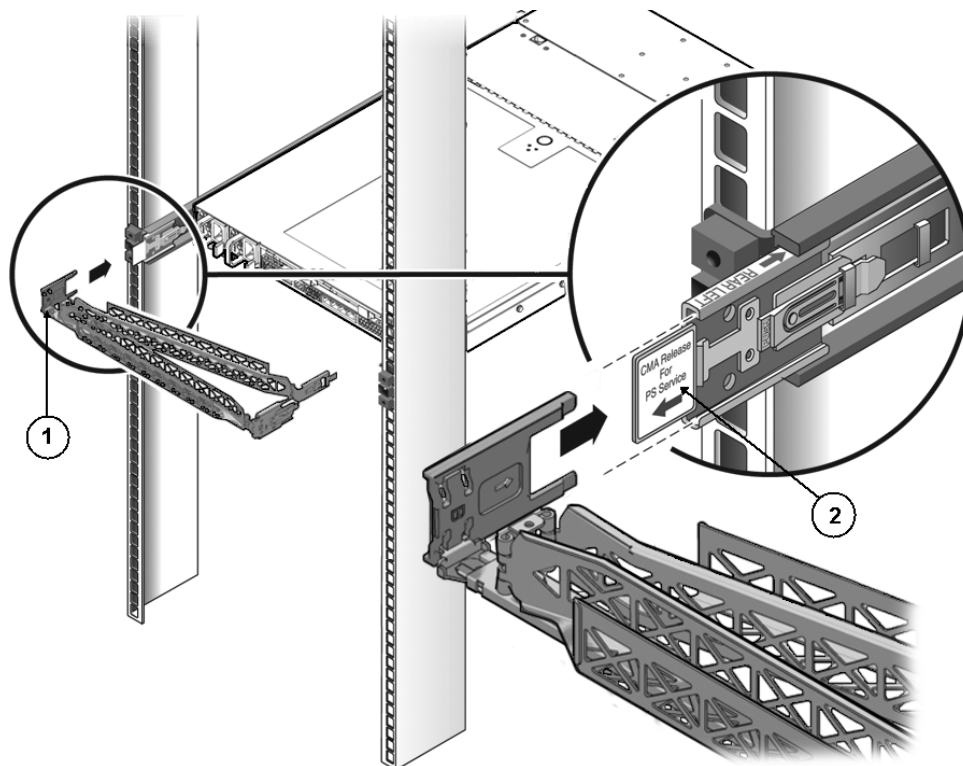


図の説明

-
- | | |
|---|-----------------|
| 1 | CMA スライドレールコネクタ |
| 2 | 右側スライドレール |
-

8. 左側の CMA スライドレールコネクタを、「カチッ」と音がして固定されるまで、左側スライドレール構成部品に差し込みます (図 2-12)。

図 2-12 レール拡張部品コネクタへの CMA アームの接続



図の説明

-
- 1 CMA 拡張部品アーム (左側スライドレール)
2 CMA 拡張部品
-

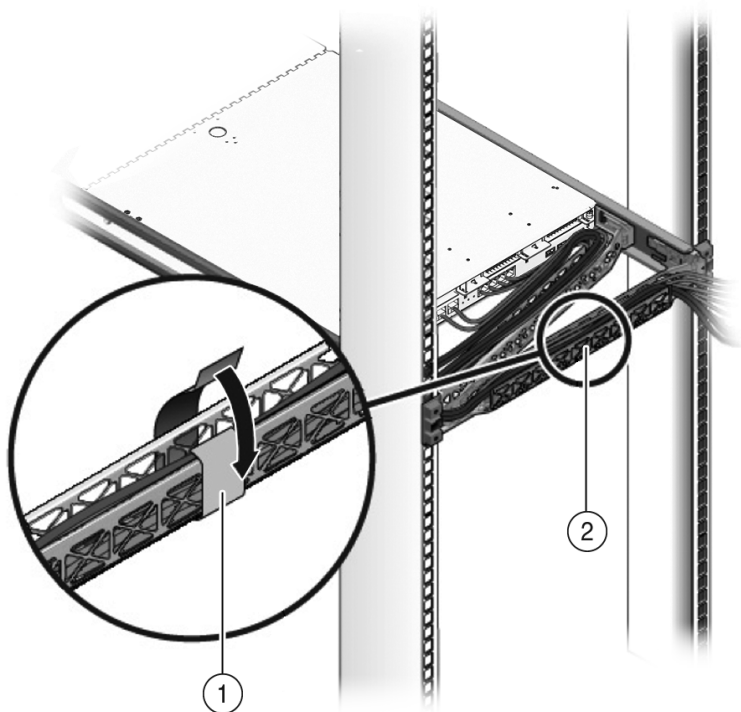
9. 必要に応じて、サーバーまで経路を設定してケーブルを取り付けます。

注 – サーバーケーブルの取り付け方法については、[45 ページの「ケーブルの接続」](#)を参照してください。

10. ケーブルフックとループストラップを CMA に取り付け、所定の位置に押し込んでケーブルを固定します (図 2-13)。

最善の結果を得るには、3 つのケーブルストラップを CMA の背面側に等間隔に配置し、3 つのケーブルストラップをサーバーにもっとも近い CMA の側面に配置します。

図 2-13 CMA ケーブルストラップの設置



図の説明

-
- | | |
|---|---------------|
| 1 | CMA ケーブルストラップ |
| 2 | CMA アーム |
-

Sun Fire X4270 M2 サーバーへのケーブル管理アームの取り付け

ケーブル管理アーム (Cable Management Arm、CMA) はオプションの構成部品であり、ラック内のサーバーケーブルの配線に使用できます。

▼ ケーブル管理アームの取り付け

オプションの CMA を取り付けるには、ここで説明している手順に従います。

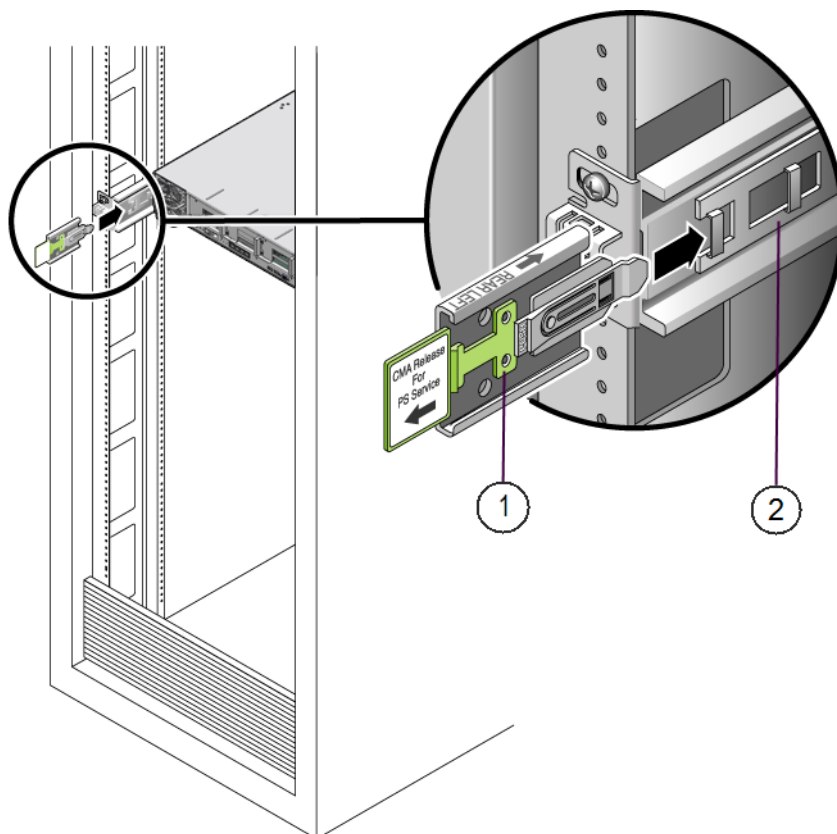
1. CMA の部品を開梱します。
2. CMA を機器ラックの背面に移動し、サーバーの背後に十分な作業スペースがあることを確認します。

注 – この手順の「左」と「右」は、機器ラックの背面を見たときの左と右を示します。

3. テープを剥がして CMA の部品を分けます。
CMA レール拡張部品は、CMA アームにテープで固定されている可能性があります。

4. CMA レール拡張部品を、「カチッ」と音がして固定されるまで、左側スライドレールに差し込みます (図 2-14)。

図 2-14 左側スライドレール後部への CMA レール拡張部品の挿入

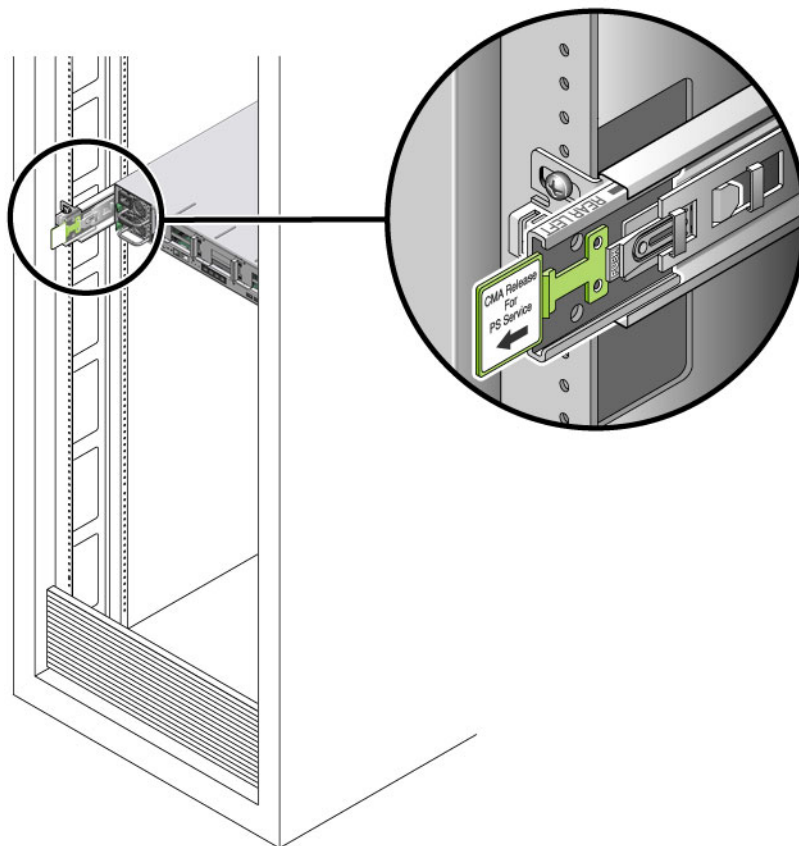


図の説明

-
- | | |
|---|-------------|
| 1 | CMA レール拡張部品 |
| 2 | 左側スライドレール |
-

5. CMA レール拡張部品がスライドレールにかみ合っていることを確認します (図 2-15)。

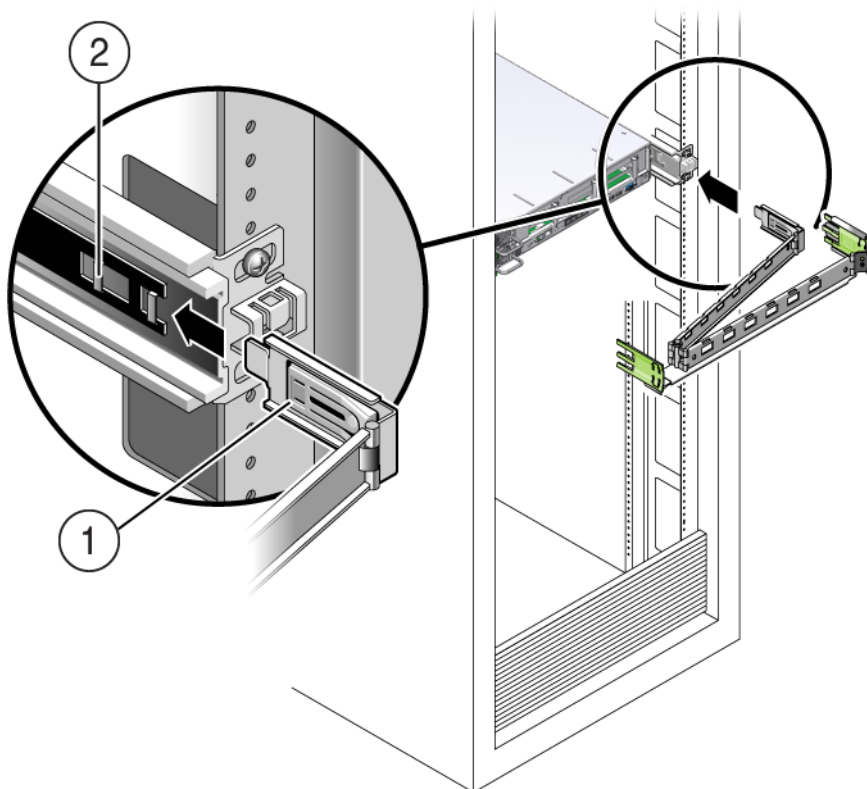
図 2-15 CMA レール拡張部品と左側スライドレールのかみ合わせ



注 – 残りの設置作業は、CMA を支えながら行ってください。アームは、3 つの取り付け箇所すべてに固定されるまで、自重がかかるように吊り下げたりしないでください。

6. CMA の固定部品コネクタを、「カチッ」と音がして固定されるまで、右側のスライドレールに差し込みます (図 2-16)。

図 2-16 右側スライドレール後部への CMA 取り付けブラケットの挿入

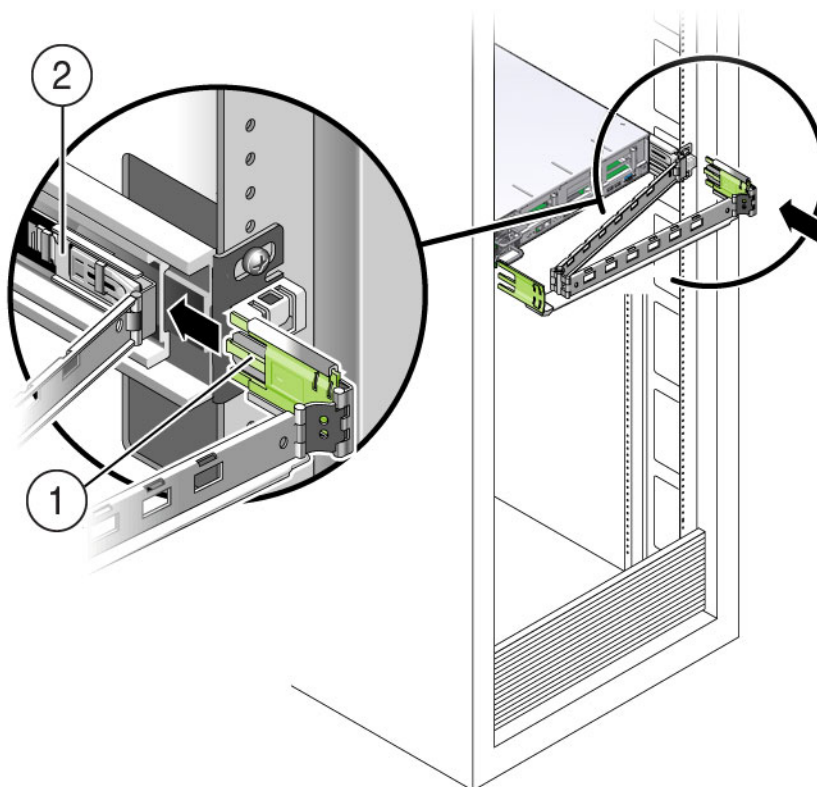


図の説明

-
- | | |
|---|-----------|
| 1 | CMA 固定部品 |
| 2 | 右側スライドレール |
-

7. 右側の CMA スライドレールコネクタを、「カチッ」と音がして固定されるまで、右側スライドレール構成部品に差し込みます (図 2-17)。

図 2-17 右側スライドレール後部への CMA スライドレールコネクタの挿入

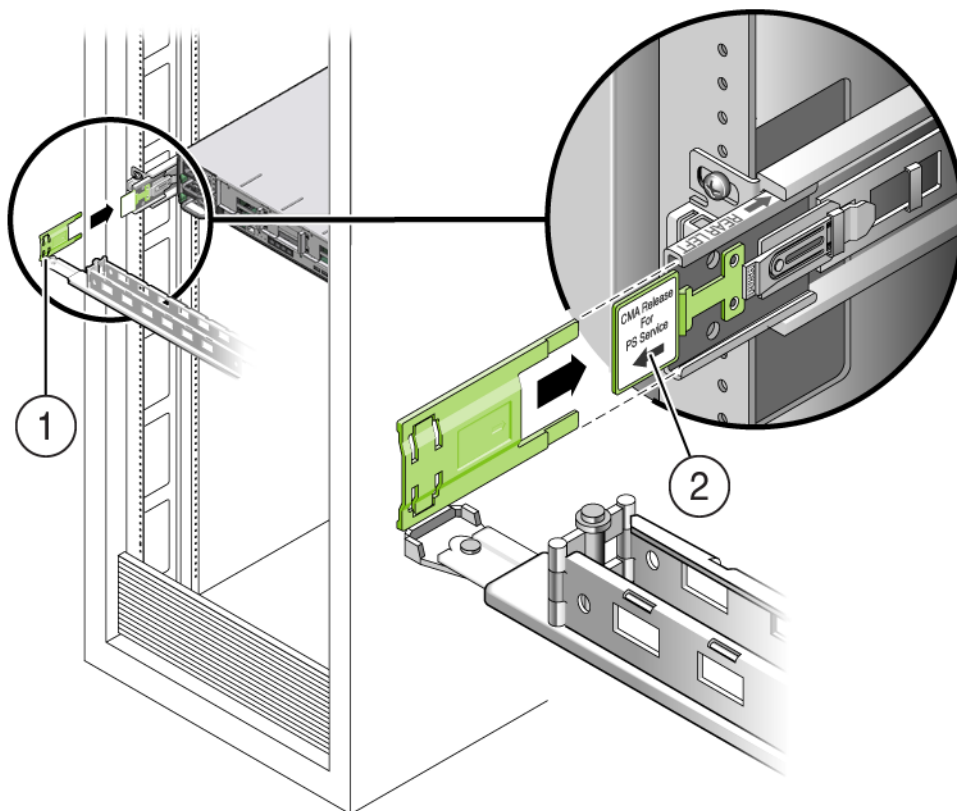


図の説明

-
- | | |
|---|-----------------|
| 1 | CMA スライドレールコネクタ |
| 2 | 右側スライドレール |
-

8. 左側の CMA スライドレールコネクタを、「カチッ」と音がして固定されるまで、左側スライドレール構成部品に差し込みます (図 2-18)。

図 2-18 レール拡張部品コネクタへの CMA アームの接続



図の説明

-
- | | |
|---|-------------------------|
| 1 | CMA 拡張部品アーム (左側スライドレール) |
| 2 | CMA 拡張部品 |
-

9. 必要に応じて、サーバーまで経路を設定してケーブルを取り付けます。

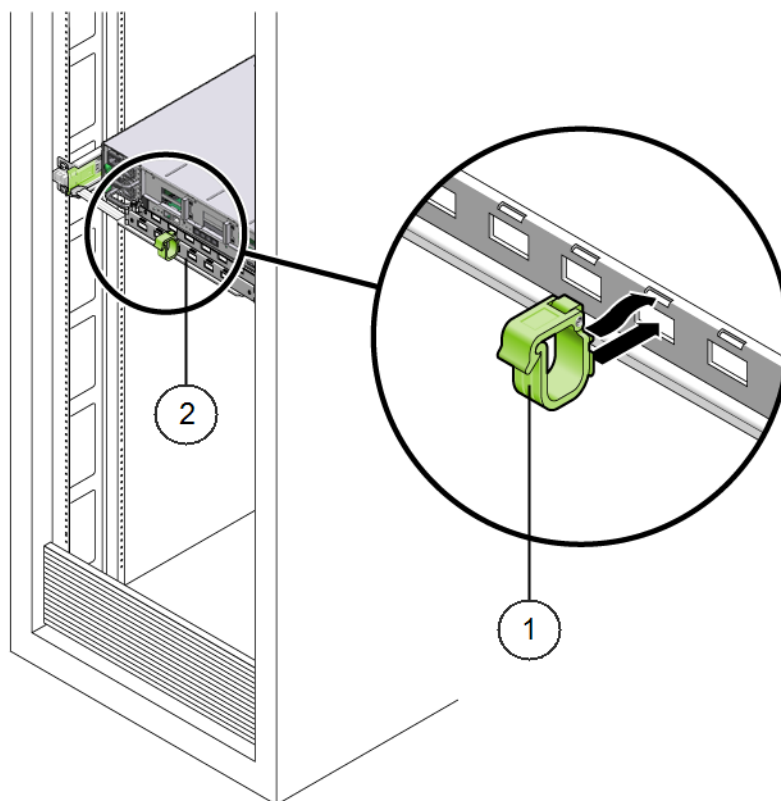
注 – サーバーケーブルの取り付け方法については、[45 ページの「ケーブルの接続」](#)を参照してください。

10. 必要に応じて、ケーブルハンガーを CMA に接続し、所定の位置にはめ込んでケーブルを固定します (図 2-19)。

注 – ケーブルハンガーは CMA にあらかじめ取り付けられています。ケーブルハンガーを CMA に取り付け直す必要がある場合は、この手順を実行してください。

最善の結果を得るには、3 つのケーブルハンガーを CMA の背面側に等間隔に配置し、3 つのケーブルハンガーをサーバーにもっとも近い CMA の側面に配置します。

図 2-19 CMA ケーブルハンガーの設置



図の説明

-
- 1 CMA ケーブルハンガー
 - 2 CMA アーム
-

スライドレールと CMA の動作の確認

スライドレールと CMA が正しく動作していることを確認するには、次の手順に従います。

▼ スライドレールと CMA の動作の確認

注 – この手順は、2 人の作業員で実行することをお勧めします。1 人がサーバーをラックの前後に動かし、もう 1 人がケーブルと CMA を監視します。

1. スライドレールがストップに達するまで、ラックからサーバーをゆっくりと引き出します。
2. バインドまたはねじれがないか、接続されたケーブルを検査します。
3. CMA がスライドレールからいっぱいまで伸びることを確認します。
4. 次の手順に従って、サーバーをラック内に押し込みます。

サーバーを完全に引き出したときに、2 対のスライドレールストップを解放してサーバーをラックに戻します。

 - a. 最初の対のストップは各スライドレールの内側 (サーバーの背面パネルのすぐ後ろ) にあるレバーです。レバーには「PUSH」というラベルが付いています。両方のレバーを同時に押し、サーバーをラックに向かってスライドさせます。

サーバーは約 46 cm (18 インチ) スライドして停止します。

ケーブルと CMA が引っかからずに格納されることを確認します。
 - b. 2 番目の対のストップは、各固定部品の前面近くにあるスライドレールリリースボタンです (図 2-7)。両方のスライドレールリリースボタンを同時に押すか引いて、両方のスライドレールロックがかみ合うまでサーバーを完全にラック内に押し込みます。
5. 必要に応じて、ケーブルストラップと CMA を調整します。

第3章

サーバーのセットアップ

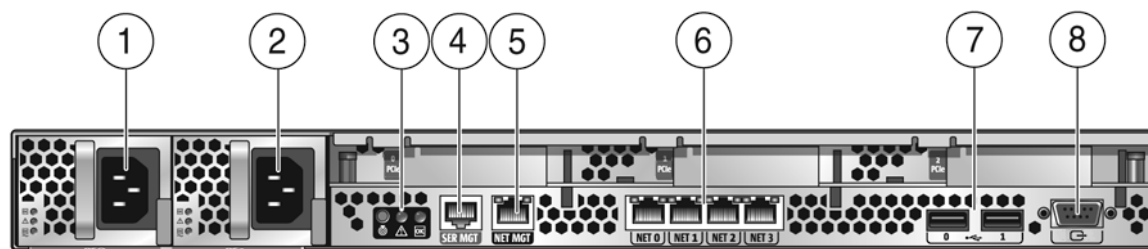
この章では、サーバーにケーブルを接続し、初めて電源を投入する方法について説明します。この章では、次の項目について説明します。

- [45 ページの「ケーブルの接続」](#)
- [47 ページの「SP の初期構成用のスタンバイ電源の供給」](#)
- [48 ページの「サーバーへの初めての主電源投入」](#)
- [50 ページの「サーバーの主電源の切断」](#)

ケーブルの接続

サーバーの背面パネルに電源ケーブルおよびデバイスデータケーブルを接続します。[図 3-1](#) に Sun Fire X4170 M2 サーバーの背面パネルのコネクタの位置と説明を示します。

図 3-1 Sun Fire X4170 M2 サーバー M2 サーバーの背面パネルのコネクタ

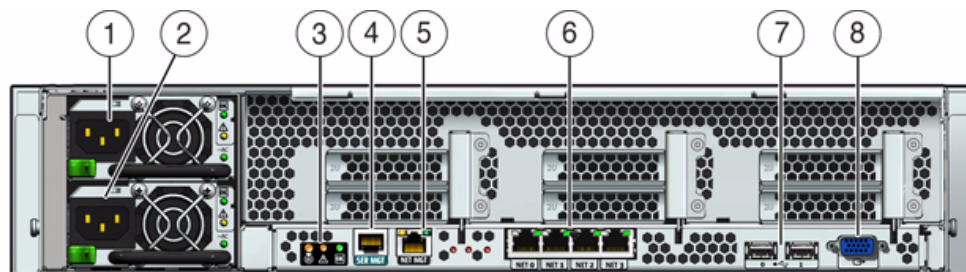


図の説明

- | | |
|----------------------------------|---|
| 1 電源ユニット 0 コネクタ | 5 サービスプロセッサ (Service processor、SP)
ネットワーク管理 (NET MGT) Ethernet ポート |
| 2 電源ユニット 1 コネクタ | 6 ギガビット Ethernet ポート NET 0、1、2、3 |
| 3 システム状態 LED | 7 USB 2.0 ポート (0、1) |
| 4 シリアル管理 (SER MGT)/RJ-45 シリアルポート | 8 HD15 ビデオコネクタ (アナログ VGA) |

図 3-2 に Sun Fire X4270 M2 サーバー M2 サーバーの背面パネルのコネクタの位置と説明を示します。

図 3-2 Sun Fire X4270 M2 サーバー M2 サーバーの背面パネルのコネクタ



図の説明

- | | |
|----------------------------------|--|
| 1 電源ユニット 1 コネクタ | 5 サービスプロセッサ (Service processor、SP)
ネットワーク管理 (NET MGT) Ethernet ポート |
| 2 電源ユニット 0 コネクタ | 6 ギガビット Ethernet 背面パネルのポートとコネク
タ: 場所: Sun Fire X4270 M2 サーバー[はいめん
ばねるのぼーととこねくた: ばしよ: Sun Fire
X4270 M2 サーバー]ポート NET 0、1、2、3 |
| 3 システム状態 LED | 7 USB 2.0 ポート (0、1) |
| 4 シリアル管理 (SER MGT)/RJ-45 シリアルポート | 8 HD15 ビデオコネクタ (アナログ VGA) |

▼ サーバーのケーブル接続

外部ケーブルを次の順序でサーバーに接続します。図 3-1 および図 3-2 を参照してください。

1. 必要に応じて、Ethernet ケーブルを OS サポート用のギガビット Ethernet (NET) コネクタに接続します [6]。
2. (省略可能) システムコンソールで直接対話する場合は、マウスやキーボードなどの外部デバイスをサーバーの USB コネクタ [7] に、モニターを HD 15 ビデオコネクタ [8] に接続します。
3. ネットワークで Integrated Lights Out Manager (ILOM) ソフトウェアに接続する場合は、Ethernet ケーブルを NET MGT とラベル付けされた Ethernet ポート [5] に接続します。
4. シリアル管理ポートを使用して ILOM のコマンド行インタフェース (Command Line Interface、CLI) にアクセスする場合は、シリアルヌルモデムケーブルを SER MGT とラベル付けされた RJ-45 コネクタ [4] に接続します。

シリアルコンソールからのシステム出力の確認方法については、53 ページの「ILOM へのログイン」を参照してください。

SP の初期構成用のスタンバイ電源の供給

初期構成の前に、サービスプロセッサ (Service Processor、SP) にスタンバイ電源を供給するには、次の手順を実行します。

▼ サーバーへのスタンバイ電源の供給

1. アースされた 2 本のサーバー電源コードをアースされたコンセントに接続します。
2. 2 本のサーバー電源コードをサーバーの背面パネルの AC コネクタに接続します (図 3-1 および図 3-2 [1、2])。

電源が接続されると、サーバーはスタンバイ電源モードに入ります。スタンバイ電源モードでは、前面パネルの電源/OK LED (図 1-2 および図 1-3 を参照) がスタンバイ点滅パターン (0.1 秒点灯、2.9 秒消灯) で点滅し、SP が機能していることを示します。数分後、端末デバイスに SP ログインプロンプトが表示されます。サーバーはまだ初期化されていませんし、電源も入っていません。

注 – プラットフォームのオペレーティングシステムをインストールおよび設定する準備が整うまで、主電源をサーバーのほかの部分に供給しないでください。この時点では、電源は SP ボードと電源装置のファンにのみ供給されます。

サーバーへの初めての主電源投入

主電源がサーバーに供給されると、ILOM のすべてのパラメータにアクセスしたり、インストール済みのオペレーティングシステムを設定したり、サポートされているオペレーティングシステムをインストールしたりすることができます。

▼ サーバーへの主電源の投入

初めてサーバーの主電源を投入するには、次の手順に従います。

1. 2 本の電源コードが接続され、スタンバイ電源がオンの状態であることを確認します。
スタンバイ電源モードでは、フロントパネルの電源/OK LED が点滅します。
図 1-2 および図 1-3 を参照してください。
2. 次の補足手順を実行して、シリアル管理 (SER MGT) ポートを経由してサーバーに接続していることを確認します。
 - a. サーバーハードウェアが取り付けられ、ケーブルが差し込まれていることを確認します。
 - b. ご使用の端末、ラップトップ、PC、または端末サーバーが稼働していることを確認します。

- c. 端末デバイス、またはノートパソコンか PC で実行されている端末エミュレーションソフトウェアを以下のように設定します。
- 8, N, 1: データビット 8、パリティなし、ストップビット 1
 - 9600 ボー
 - ハードウェアのフローコントロール無効 (CTS/RTS)
 - ソフトウェアのフローコントロール無効 (XON/XOFF)
- d. ヌルシリアルモデムケーブルをサーバーの背面パネルにある SER MGT/RJ-45 ポートから端末デバイスに接続します (未接続の場合)。
SER MGT/RJ-45 ポートの場所については、[図 3-1](#) および [図 3-2](#) を参照してください。
- e. 端末デバイスで Enter キーを押して、端末デバイスと ILOM SP との接続を確立します。
SP は最終的に次の例のようなログインプロンプトを表示します。
SUNSP0003BA84D777 ログイン:
このログインプロンプトの例は次のような内容です。
- 文字列 SUNSP はすべての SP に共通です。
 - 0003BA84D777 はデフォルトで表示される製品のシリアル番号の例です。この値は、ユーザーまたは DHCP サーバーによって割り当てられるホスト名の場合もあります。
- f. ILOM にログインします。
デフォルトのユーザー名は **root** です。
デフォルトのパスワードは **changeme** です。
ILOM に正常にログインしたことを示すデフォルトのコマンドプロンプト (->) が、ILOM に表示されます。
3. サーバーのフロントパネルにある、埋め込み式の電源ボタンを押してから離します。
主電源がサーバーに供給されると、電源ボタンのとなりにある緑色の電源/OK LED が点灯し続けます。
4. サーバーの SER MGT ポートからインストール済みの Solaris OS をインストールする画面を表示するには、次のとおりに入力します。
-> **start /SP/console**
5. インストール済みの Solaris OS ソフトウェアを設定するには、[第 6 章](#)に進みます。

注 – シリアルコンソールから ILOM コマンド行インタフェースに戻るには、使用しているキーボード (米国または国際) に応じて **Esc** (キーを押します)。

サーバーの主電源の切断

サーバーの電源を切断する必要がある場合は、正常な停止または緊急電源切断を実行できます。詳細は、次の手順を参照してください。

▼ 主電源を切断する

- サーバーの主電源をオフにするには、次のいずれかの方法に従います。
 - 正常な停止 – サーバーのフロントパネルにある電源ボタンをペンや他の先の尖ったもので一瞬押します。ACPI (Advanced Configuration and Power Interface) が有効なオペレーティングシステムでは、これで適切な順序でのシャットダウンが実行されます。ACPI が有効なオペレーティングシステムを実行していないサーバーの場合は、即時にスタンバイ電源モードに移行して停止します。
 - 緊急電源切断 – 主電源がオフになり、サーバーがスタンバイ電源モードに移行するまで、電源ボタンを少なくとも 4 秒間押し続けます。主電源がオフになると、前面パネルにある電源/OK LED が点滅し、サーバーがスタンバイ電源モードにあることを示します。



注意 – サーバーの電源を完全に切断するには、サーバーの背面パネルから AC 電源コードを取り外します。

第4章

ILOM の設定

この章では、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) ソフトウェアへのアクセス方法と、サーバーサービスプロセッサ (Service Processor、SP) の IP アドレスの初期設定方法を説明します。この章では、次の項目について説明します。

- [52 ページの「IP 設定作業のチェックリスト」](#)
- [53 ページの「ILOM へのログイン」](#)
- [58 ページの「ILOM からのログアウト」](#)
- [58 ページの「サーバーの管理」](#)

IP 設定作業のチェックリスト

表 4-1 に、サーバー SP の IP アドレスを初期設定するための作業手順を示します。

表 4-1 IP アドレス設定作業

手順	要件	説明
1	サーバーをシャーシに取り付けます。	サーバーをシャーシに適切に設置します。詳細については、このマニュアルの第 1 章から第 3 章を参照してください。
2	ILOM へのコンソール接続を確立します。	<p>ローカルまたはリモートコンソールを通じて、ILOM サーバー SP との接続を確立できます。</p> <ul style="list-style-type: none">ローカルシリアルコンソール。サーバーの背面パネルのシリアル管理 (SER MGT/RJ-45) ポートにシリアルコンソールを接続します。詳細は、45 ページの「ケーブルの接続」を参照してください。リモートコンソール。サーバーの背面パネルのネットワーク管理 (NET MGT) Ethernet ポートに Ethernet LAN ケーブルを接続します。サーバーの Ethernet ポートを使用するのは、ILOM に接続するもっとも堅牢性の高い方法です。この接続方法では、コマンド行インタフェースと Web インタフェースの両方をサポートしています。詳細は、45 ページの「ケーブルの接続」を参照してください。
3	管理者ユーザーアカウントを取得します。	<p>ILOM に IP アドレスを設定するには、管理者アカウントで ILOM にログインする必要があります。</p> <p>各サーバー SP には、管理者アカウントが出荷時にすでに設定されています。設定済みの管理者アカウント名は root で、パスワードは changme です。初期設定が終わったらパスワードを変更することを強くお勧めします。このアカウントからは、サービスプロセッサのすべての機能とコマンドへの組み込み管理者特権 (読み取りおよび書き込みアクセス) が利用できます。ILOM のユーザーアカウントの詳細については、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 マニュアルセット (以前の Sun Integrated Lights Out Manager マニュアルセット) を参照してください。</p>
4	ILOM にログインします。	この章に記されている手順に従って、ILOM にログインします。See 53 ページの「ILOM へのログイン」。
5	IP アドレスを設定します。	この章に記されている手順に従って、IP アドレスを初期設定します。See 55 ページの「IP アドレスの設定」。
6	該当する場合、ILOM に関する追加情報を入手します。	ILOM の IP アドレスの設定または変更については、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 マニュアルセットを参照してください。

ILOM へのログイン

この節では、次に示すトピックおよび手順を取り上げます。

- 53 ページの「ILOM SP インタフェースについて」
- 53 ページの「シリアル接続を使用して ILOM にログインする」
- 54 ページの「Ethernet 接続から CLI を使用して ILOM にログインする」
- 55 ページの「IP アドレスの設定」

ILOM SP インタフェースについて

サーバー上のシステム管理をサポートする複数の ILOM SP インタフェースの中から 1 つのインタフェースを選択できます。次の ILOM SP インタフェースを通して SP ファームウェアアプリケーションにアクセスできます。

- シリアルポートのコマンド行インタフェース (Command-Line Interface、CLI) (ローカルアクセス)
- Secure Shell (SSH) CLI (ネットワーク経由の遠隔アクセス)
- Web ブラウザユーザーインタフェース (Browser User Interface、BUI) (ネットワーク経由の遠隔アクセス)

▼ シリアル接続を使用して ILOM にログインする

シリアル接続を使用して ILOM にログインするには、次の手順を実行します。

1. サーバーへのシリアルコンソール接続のセキュリティが確保され、接続が正しく動作していることを確認します。
2. 次のシリアル通信設定が使用されていることを確認します。
 - 8N1: データビット 8、パリティなし、ストップビット 1
 - 9600 ボー
 - ハードウェアのフローコントロール無効 (CTS/RTS)
3. Enter キーを押して、シリアルコンソールと ILOM の間の接続を確立します。
ILOM へのログインプロンプトが表示されます。
4. 管理者アカウントを使って、ILOM のコマンド行インタフェース (Command-Line Interface、CLI) にログインします。

注 – サーバーの出荷時に設定されているデフォルトの ILOM 管理者アカウントは root、パスワードは changeme です。このデフォルトの管理者アカウントが変更されている場合は、システム管理者に連絡して、管理者特権を持つ ILOM ユーザーアカウントを取得してください。

ILOM に正常にログインしたことを示すデフォルトのコマンドプロンプト (->) が、ILOM に表示されます。

5. [55 ページの「IP アドレスの設定」](#)に進みます。

▼ Ethernet 接続から CLI を使用して ILOM にログインする

注 – Ethernet 接続を使用して ILOM にログインするには、サーバー SP の IP アドレスを知っている必要があります。IP アドレスの表示または割り当てについては、[55 ページの「IP アドレスの設定」](#)を参照してください。

Ethernet 接続を使用して ILOM にログインするには、次の手順を実行します。

1. Secure Shell (SSH) セッションを使用し、管理者アカウントのユーザー名と、サーバー SP の IP アドレスを指定して、ILOM にログインします。

例:

```
ssh -l username host
```

または

```
ssh username@host
```

host は IP アドレスまたはホスト名 (DNS を使用している場合) です。

パスワードの入力を求める ILOM のプロンプトが表示されます。

2. 管理者アカウントのパスワードを入力します。

例:

```
ssh root@192.168.25.25
```

```
root@192.168.25.25's password: changeme
```

注 – サーバーの出荷時に設定されているデフォルトの ILOM 管理者アカウントは root、パスワードは changeme です。このデフォルトの管理者アカウントが変更されている場合は、システム管理者に連絡して、管理者特権を持つ ILOM ユーザーアカウントを取得してください。

ILOM に正常にログインしたことを示すデフォルトのコマンドプロンプト (->) が、ILOM に表示されます。

3. インストール済みのオペレーティングシステムを設定する場合は、[第 5 章](#)に進みます。

IP アドレスの設定

ILOM を使用してサーバーを管理するには、サーバーの ILOM SP (ネットワーク) アドレスを特定する必要があります。

DHCP サーバーを使用して IP アドレスを割り当てている場合、次の要件を満たした後、ILOM SP に IP アドレスが割り当てられます。

- ネットワーク管理 (NET MGT) ポート経由でネットワークに接続すること。
- DHCP サービスがネットワークインフラストラクチャに存在すること。

3 回の DHCP 要求後に DHCP サーバーに到達できない場合、ネットワーク管理ポートの MAC アドレスに基づく静的 IP アドレスが ILOM SP に割り当てられます。この IP アドレスの形式は、常に 192.168.xxx.xxx です。

次のインタフェースのいずれかを使用して、セットアップ時に IP アドレスを表示または設定できます。

- BIOS 設定ユーティリティ
- ILOM コマンド行インタフェース (Command-Line Interface、CLI)

どちらのインタフェースもサーバーに直接シリアル接続する必要があります。サーバーにデバイスを接続する方法については、[45 ページ](#)の「[ケーブルの接続](#)」を参照してください。

注 – IP アドレスを特定したら、ILOM Web インタフェースを使用して IP アドレスを表示または変更することもできます。ILOM Web インタフェースについては、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 マニュアルセットを参照してください。

セットアップ時に ILOM SP IP アドレスを表示または設定するには、次の手順を参照してください。

- [56 ページ](#)の「[BIOS 設定ユーティリティを使用した ILOM SP IP アドレスの表示または割り当て](#)」
- [57 ページ](#)の「[ILOM CLI を使用した ILOM SP IP アドレスの表示または割り当て](#)」

▼ BIOS 設定ユーティリティを使用した ILOM SP IP アドレスの表示または割り当て

注 – サーバーに主電源を供給する準備ができれば、次の手順を実行してください。

BIOS 設定ユーティリティにアクセスして ILOM SP IP アドレスを表示するには、次の手順に従います。

1. サーバーの電源をオンにします (サーバーが動作中の場合は、再起動します)。
48 ページの「サーバーへの主電源の投入」を参照してください。
2. 電源投入時自己診断 (Power-On Self-Test、POST) の実行中に、BIOS のスプラッシュ画面が表示されたら、F2 キーを押して BIOS 設定ユーティリティにアクセスします。
3. キーボードの左右の矢印キーを使用して、「詳細 (Advanced)」タブに移動します。
「詳細 (Advanced)」画面が表示されます。
4. 上下矢印キーを使用して「IPMI 設定 (IPMI Configuration)」オプションを選択し、Enter キーを押してサブ画面に移動します。
「IPMI 設定 (IPMI Configuration)」サブ画面が表示されます。
5. 上下矢印キーを使用して「LAN 設定 (Set LAN Configuration)」オプションを選択し、Enter キーを押します。
「LAN 設定 (LAN Configuration)」サブ画面が表示され、現在の ILOM SP IP アドレスが表示されます。
6. 次のいずれかの手順を実行します。
 - DHCP サーバーによって IP アドレスが割り当てられている場合は、SSH または Web ブラウザを使用して ILOM にログインするために必要になるので、IP アドレスを記録しておきます。

注 – IP アドレスが 192.168.xxx.xxx の形式である場合は、DHCP サーバーによってアドレスが割り当てられていない可能性があり、SP が静的アドレスを使用している可能性があります。

- IP アドレスを割り当てるには、「LAN 設定 (Set LAN Configuration)」を選択し、矢印キーを使用して設定を選択します。適切な設定を指定します。
7. F10 キーを押して変更を保存し、BIOS 設定ユーティリティを終了します。

▼ ILOM CLI を使用した ILOM SP IP アドレスの表示または割り当て

注 – 次の手順では、システムが出荷時のデフォルト設定であることを前提とします。

ILOM CLI を使用して ILOM SP IP アドレスを表示または割り当てるには、次の手順を実行します。

1. DHCP サーバーが正しく設定されていることを確認します。
2. サーバーの背面のネットワーク管理 (NET MGT) Ethernet ポートに Ethernet LAN ケーブルが接続されていることを確認します。
3. 該当する場合、サーバーのカバーに記載されているサーバー SP の MAC アドレスを読み取ります。
4. [53 ページの「シリアル接続を使用して ILOM にログインする」](#)の手順に従って ILOM にログインします。
5. ILOM コマンド行インタフェース (Command-Line Interface、CLI) プロンプト (->) に次のコマンドを入力して、作業用ディレクトリを設定します。

```
-> cd /SP/network
```

6. 次のいずれかの手順を実行します。

- ILOM SP に割り当てられている動的 IP アドレスを表示するには、次のように入力します。

```
-> show /SP/network
```

- 静的 IP アドレスを設定するには、次のように入力します。

```
-> set /SP/network/ pendingipdiscovery=static
```

```
-> set /SP/network/ pendingipaddress=IP address
```

```
-> set /SP/network/ pendingipnetmask=Netmask address
```

```
-> set /SP/network/ pendingipgateway=Gateway address
```

```
-> set /SP/network/ commitpending=true
```

- 動的 IP アドレスを設定するには、次のように入力します。

```
-> set /SP/network pendingipdiscovery=dhcp
```

```
-> set /SP/network commitpending=true
```

ILOM からのログアウト

ILOM からログアウトする準備ができたなら、この節の手順に従います。

▼ CLI を使用した ILOM からのログアウト

CLI を使用して ILOM からログアウトするには、次の手順を実行します。

- コマンドプロンプトで、次のように入力します。

-> **exit**

サーバーの管理

状況に応じて、いくつかのサーバー管理オプションがあります。

- 多数のサーバーの管理

さまざまなシステム管理ツールを使用してサーバーを管理することができます。システム管理ツールについては、

(<http://www.sun.com/systemmanagement/managementtools.jsp>)

これらのツールの例には次のものがあります。

- 使用しているサーバーが多数の x86 および SPARC サーバーのうちの 1 つであり、単一のインタフェースから管理する場合は、Oracle Enterprise Manager Ops Center を使用できます。詳細は、(<http://www.sun.com/software/products/opscenter>)
- エンタープライズサーバーを監視する場合は、Sun Management Center を利用できます。詳細は、(<http://www.sun.com/software/products/sunmanagementcenter/index.xml>)
- すでにサードパーティのシステム管理ツールがある場合は、サーバーを多数のサードパーティツールに組み込むことができます。詳細は、(<http://www.sun.com/systemmanagement/tools.jsp>)

■ 単一のサーバーの管理

- Sun Installation Assistant (SIA) は、サーバーの初期構成に使用できるアプリケーションです。SIA を使用すると、ファームウェア (ILOM ファームウェア、BIOS、および RAID コントローラソフトウェア) を更新したり、Linux または Windows オペレーティングシステムのインストールを自動化したりすることができます。詳しくは、『Sun Installation Assistant 2.3 through 2.4 User's Guide for x64 Servers』を参照してください。
- Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) は、サーバーの状態と構成の監視に使用できる組み込みソフトウェアおよびハードウェアです。詳しくは、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 マニュアルセットおよび『Sun Fire X4170 M2 および X4270 M2 サーバーの Oracle 統合ライトアウトマネージャー (ILOM) 3.0 補足』を参照してください。

これらの SIA および ILOM のマニュアルは、

(<http://docs.sun.com/app/docs/prod/sf.x4170m2#hic>) および

(<http://docs.sun.com/app/docs/prod/sf.x4270m2#hic>) からオンラインで入手できます。

第5章

オペレーティングシステムのセットアップ

この章では、オプションのインストール済みの Oracle Solaris 10 10/09 オペレーティングシステム (Operating System、OS) をインストールするためにサーバーを準備する方法について説明します。

第 4 章の手順に従い、ネットワーク設定を使用して ILOM SP を設定したら、オプションのインストール済みの Solaris OS を設定したり、Linux または Windows OS をインストールしたり、Oracle Virtual Machine や VMware ESX/ESXi などの仮想マシンソフトウェアをインストールしたりすることができます。

この章では、次の項目について説明します。

- 62 ページの「取り付けを開始する前に」
- 62 ページの「サポートされているオペレーティングシステム」
- 64 ページの「インストールのためのワークシート」
- 66 ページの「インストール済みのオペレーティングシステムの設定」

取り付けを開始する前に

インストール済みの OS の設定を行う前に、次の作業を行う必要があります。

- サーバー SP の IP アドレスを設定します。詳細は、[55 ページの「IP アドレスの設定」](#)を参照してください。
- サーバーの主電源が入っていることを確認します。詳細は、[48 ページの「サーバーへの初めての主電源投入」](#)を参照してください。
- [64 ページの「インストールのためのワークシート」](#)に示す設定に必要な情報を調べます。デフォルト値はアスタリスク (*) で示しています。

注 – サーバーまたはほかのシャーシ部品の MAC アドレスを確認するには、Customer Information Sheet (部品に付属) を参照するか、サーバーまたはシャーシ部品に取り付けられている印刷された MAC アドレスラベルを検査します。

サポートされているオペレーティングシステム

Sun Fire X4170 M2 および X4270 M2 サーバー は、次のオペレーティングシステムまたはそれ以降のリリースのインストールと使用をサポートします。

表 5-1 サポートされているオペレーティングシステム

オペレーティングシステム	サポートされているバージョン	関連項目
Oracle Solaris	• Oracle Solaris 10 10/09 以降	<ul style="list-style-type: none">• オプションのインストール済みの OS をインストールする場合は、第 6 章を参照してください。• インストール用メディアから Solaris OS をインストールする場合は、『Linux、仮想マシンソフトウェア、および Oracle Solaris オペレーティングシステムの Sun Fire X4170 M2 および X4270 M2 サーバー設置マニュアル』(821-1623)を参照してください。

表 5-1 サポートされているオペレーティングシステム (続き)

オペレーティングシステム	サポートされているバージョン	関連項目
Linux	<ul style="list-style-type: none"> • Oracle Enterprise Linux Server (OEL) 5.4、64 ビット • Red Hat Enterprise Linux (RHEL) 5.4、64ビット • SuSE Linux Enterprise Server (SLES) 10 SP3、64 ビット • SLES 11、64 ビット 	<ul style="list-style-type: none"> • 『Linux、仮想マシンソフトウェア、および Oracle Solaris オペレーティングシステムの Sun Fire X4170 M2 および X4270 M2 サーバー設置マニュアル』 (821-1623)
仮想マシンソフトウェア	<ul style="list-style-type: none"> • Oracle Virtual Machine (OVM) 2.2.1 • VMware ESX 4.0 Update 1 • VMware ESXi 4.0 Update 1 	<ul style="list-style-type: none"> • 『Linux、仮想マシンソフトウェア、および Oracle Solaris オペレーティングシステムの Sun Fire X4170 M2 および X4270 M2 サーバー設置マニュアル』 (821-1623)
Windows	<ul style="list-style-type: none"> • Microsoft Windows Server 2008 SP2、Standard Edition、64 ビット • Microsoft Windows Server 2008 SP2、Enterprise Edition、64 ビット • Microsoft Windows Server 2008 SP2、Datacenter Edition、64 ビット • Microsoft Windows Server 2008 R2、Standard Edition、64 ビット • Microsoft Windows Server 2008 R2、Enterprise Edition、64 ビット • Microsoft Windows Server 2008 R2、Datacenter Edition、64 ビット 	<ul style="list-style-type: none"> • 『Windows オペレーティングシステムの Sun Fire X4170 M2 および X4270 M2 サーバー設置マニュアル』 (821-1626)

インストールのためのワークシート

表 5-2 のワークシートを使用して、インストール済みの OS の設定に必要な情報を収集します。必要なのは、システムのアプリケーションに適用される情報を収集することだけです。

表 5-2 オペレーティングシステムの設定用ワークシート

インストール用の情報		説明または例	回答: デフォルト (*)
言語		OS で使用可能な言語のリストから選択します。	英語*
ロケール		使用可能なロケールのリストから地理的地域を選択します。	
端末		使用可能な端末タイプのリストから、使用している端末のタイプを選択します。	
ネットワーク接続		システムがネットワークに接続されているかどうか。	<ul style="list-style-type: none">ネットワークに接続されているネットワークに接続されていない*
DHCP		システムで動的ホスト構成プロトコル (DHCP) を使用してネットワークインタフェースを設定できるかどうか。	<ul style="list-style-type: none">はいいいえ*
DHCP を使用しない場合には、ネットワークアドレスを記入します:	IP アドレス	DHCP を使用しない場合は、システムの IP アドレスを入力します。 例: 129.200.9.1	
	サブネット	DHCP を使用しない場合、システムはサブネットの一部かどうか。 そうである場合、サブネットのネットマスクを入力します。 例: 255.255.0.0	255.255.0.0*
	IPv6	このマシンで Ipv6 を有効にするかどうか。	<ul style="list-style-type: none">はいいいえ*
ホスト名		システムのホスト名を選択します。	
Kerberos		このマシンで Kerberos セキュリティーを有効にするかどうか。 「はい」の場合、以下の情報を収集します。 デフォルトレルム: 管理サーバー: 最初の KDC: (オプション) 追加の KDC:	<ul style="list-style-type: none">はいいいえ*

表 5-2 オペレーティングシステムの設定用ワークシート (続き)

インストール用の情報		説明または例	回答: デフォルト (*)
ネームサービス	ネームサービス	該当する場合、このシステムでどのネームサービスを使用するかを入力します。	<ul style="list-style-type: none"> • NIS+ • NIS • DNS • LDAP • なし*
	ドメイン名	システムが所属するドメインの名前を入力します。	
	NIS+ および NIS	NIS+ または NIS を選択した場合、ネームサーバーを指定するか、インストールプログラムに自動検出させるか。	<ul style="list-style-type: none"> • 指定する • 自動的に指定*
	DNS	<p>DNS を選択した場合、DNS サーバーの IP アドレスを入力します。少なくとも 1 つ以上の IP アドレスを入力する必要があります。最大で 3 つのアドレスを入力できます。</p> <p>また、DNS クエリーを行う際に検索するドメインのリストを入力することもできます。</p> <p>検索ドメイン: 検索ドメイン: 検索ドメイン:</p>	
	LDAP	<p>LDAP を選択した場合、LDAP プロファイルに関する次の情報を入力します。</p> <p>プロファイル名: プロファイルサーバー: LDAP プロファイルにプロキシ認証レベルを指定する場合、次の情報を収集します。</p> <p>プロキシバインド識別名: プロキシバインドパスワード:</p>	

表 5-2 オペレーティングシステムの設定用ワークシート (続き)

インストール用の情報	説明または例	回答: デフォルト (*)
デフォルトルート	<p>デフォルトルート IP アドレスを指定するか、OS インストールプログラムに自動検出させるか。</p> <p>デフォルトルートは、2 つの物理ネットワーク間でトラフィックを転送するブリッジを提供します。IP アドレスは、ネットワーク上の各ホストを識別する一意の数字です。</p> <p>以下の中から選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • IP アドレスを指定することができます。指定された IP アドレスを使用して、<code>/etc/defaultrouter</code> ファイルが作成されます。システムを再起動すると、指定された IP アドレスがデフォルトルートになります。 • OS インストールプログラムに IP アドレスを自動検出させることができます。ただし、その場合は、システムがルーターのあるサブネット上にあり、そのルーターがルーターディスカバリ用のインターネット制御メッセージプロトコル (Internet Control Message Protocol, ICMP) を使用して自身を通知していることが必要です。コマンド行インタフェースを使用する場合、システムの起動時にソフトウェアが IP アドレスを検出します。 • この時点でルーターを使用していないか、ソフトウェアによって IP アドレスを検出しない場合には、「なし」を選択することもできます。再起動時にソフトウェアは、自動的に IP アドレスを検出しようとします。 	<ul style="list-style-type: none"> • 指定する • 検出する • なし*
時間帯	デフォルトの時間帯を指定する方法を指定します。	<ul style="list-style-type: none"> • 地理的地域* • GM からの時差 • 時間帯ファイル
ルートパスワード	システムのルートパスワードを選択します。	

インストール済みのオペレーティングシステムの設定

この章で概説した情報を集めたら、インストール済みの Solaris オペレーティングシステムを設定できます。インストール済みの Solaris 10/09 OS を設定する場合は、[第 6 章](#)を参照してください。

第6章

インストール済みの Solaris 10 オペレーティングシステムの設定

この章では、注文があった場合にハードディスクドライブ (または半導体ドライブ) にインストール済みの Oracle Solaris 10 オペレーティングシステム (Operating System、OS) を設定する手順について説明します。インストール済みの Solaris のバージョンは、Solaris 10 10/09 以降です。

注 – SPARC システムとは異なり、サーバーの電源を入れてもインストール済みの Solaris 10 イメージはモニターに出力されません。BIOS 電源投入時自己診断 (Power-On Self-Test、POST) とその他のブート情報が出力されます。

この章では、次の項目について説明します。

- [68 ページの「取り付けを開始する前に」](#)
- [68 ページの「サーバー RAID ドライブの設定」](#)
- [69 ページの「インストール済みの Solaris 10 オペレーティングシステムの設定」](#)
- [74 ページの「Solaris 10 オペレーティングシステムのユーザー情報」](#)
- [75 ページの「Solaris インストールプログラムの使用」](#)
- [76 ページの「Solaris オペレーティングシステムの再インストール」](#)

取り付けを開始する前に

インストール済みの Solaris 10 OS の設定を行う前に、次の作業を行います。

- オプションのインストール済みの Solaris 10 OS を設定するためにサーバーを準備する手順を実行します。詳細は、第 5 章を参照してください。
- 出荷時のサーバーのコンソールはシリアルポートにリダイレクトされています。出力を VGA (ビデオポート) に送ることもできます。詳細は、73 ページの「(省略可能) コンソール出力のビデオポートへのリダイレクト」を参照してください。

サーバー RAID ドライブの設定

サーバー RAID ドライブの設定は、インストール済みのバージョンの Solaris 10 OS でサポートされている機能ではありません。インストール済みの OS は、RAID への移行中に消去されるからです。サーバードライブを RAID で設定する場合は、RAID の設定および Solaris 10 OS のインストール手順について、次のマニュアルを参照してください。

- 『LSI MegaRAID SAS ソフトウェアユーザーズガイド』、次の Web サイトで入手可能: (<http://www.lsi.com/support/sun>)
- 『Linux、仮想マシンソフトウェア、および Oracle Solaris オペレーティングシステムの Sun Fire X4170 M2 および X4270 M2 サーバー設置マニュアル』 (821-1623)、次の Web サイトで入手可能:
(<http://docs.sun.com/app/docs/prod/sf.x4170m2#hic>) または
(<http://docs.sun.com/app/docs/prod/sf.x4270m2#hic>)

インストール済みの Solaris 10 オペレーティングシステムの設定

注 – この手順を実行する前に、サービスプロセッサをセットアップする必要があります。まだ実行していない場合は、[第 4 章](#)を参照してください。

サーバーの ILOM サービスプロセッサ (Service Processor, SP) を設定した後に、インストール済みの Solaris 10 オペレーティングシステム (Operating System, OS) を SP を使用して設定し、システムコンソールに接続できます。ネットワーク経由で、またはローカルに、システムコンソール (サーバーホスト) に接続できます。

設定の実行時には、[64 ページ](#)の「インストールのためのワークシート」で調べた情報を使用します。

▼ ネットワーク経由でのシステムへのアクセス

1. Secure Shell を使用し、`root` ユーザーアカウントまたは管理者アカウントのユーザー名、サーバー SP の IP アドレス、および `root` または管理者アカウントのパスワードを指定して、ILOM にログインします。

次の例は、`root` ユーザーアカウントとそのデフォルトパスワード `changeme` を使用して ILOM にログインする方法を示したものです。

```
ssh root@host
-or-
ssh -l root host
Password: changeme
->
```

`host` は IP アドレスまたはホスト名 (DNS を使用している場合) です。

ILOM に正常にログインしたことを示すデフォルトのコマンド行プロンプト (`->`) が ILOM に表示されます。

2. サービスプロセッサの通信プロパティがデフォルトに設定されていることを確認します。次のコマンドを入力します。

```
-> show /SP/serial/host
/SP/serial/host
Targets:

Properties:
  commitpending = (Cannot show property)
  pendingspeed = 9600
  speed = 9600

Commands:
  cd
  show
```

注 – 速度が 9600 以外の値に設定されている場合は、次のコマンドを使用して変更します。

```
-> set /SP/serial/host pendingspeed=9600 commitpending=true
```

3. シリアルコンソールを起動します。次のコマンドを入力して、プロンプトに応答します。

```
-> start /SP/console
Are you sure you want to start /SP/console (y/n)? y
Serial console started.
```

これで、サーバーモジュールのホストに接続しました。

▼ システムへのローカルなアクセス

1. ケーブルを使用して、サーバーの SER MGT ポートをクライアントシステムのシリアルポートに接続します。
2. システムコンソールにアクセスするには、次の方法のいずれかを使用して端末セッションを開始します。
 - Solaris を実行しているシリアルコンソールの場合: 端末セッションを開始するための適切なコマンドを入力します。たとえば、Solaris コンソールで端末セッションを開始するには、次のように入力します。\$tip -9600 /dev/ttya

- **Windows を実行しているクライアントの場合:** 端末セッションを開始するための適切なプログラムを開きます。たとえば、Windows コンソールで端末セッションを開始するには、次を選択します。「スタート」->「プログラム」->「アクセサリ」->「通信」->「ハイパーターミナル」
- **Linux を実行しているクライアントの場合:** 端末セッションを開始するための適切なコマンドを入力します。たとえば、Linux コンソールで端末セッションを開始するには、Minicom を起動します。

Minicom は、Linux ディストリビューションに含まれているテキストベースのシリアル通信プログラムです。詳細については、Linux ディストリビューションに含まれている man ページを参照してください。

3. 端末デバイスで Enter キーを押して、端末デバイスを ILOM SP に接続します。
ILOM のログインプロンプトが表示されます。

注 – ILOM SP に電源を投入する前、または電源投入シーケンス中にサーバーのシリアルポートに接続した場合、ILOM のログインプロンプトが表示される前に SP のブートメッセージが表示されることがあります。

4. ユーザー名とパスワードを入力して、ILOM SP にログインします。

次の例では、デフォルトの root ユーザーアカウントとそのデフォルトパスワード changeme を使用しています。

```
login: root
Password: changeme
->
```

ILOM のデフォルトのコマンド行プロンプト (->) が表示されます。

5. サービスプロセッサの通信プロパティがデフォルトに設定されていることを確認します。次のコマンドを入力します。

```
-> show /SP/serial/host
/SP/serial/host
Targets:

Properties:
    commitpending = (Cannot show property)
    pendingspeed = 9600
    speed = 9600

Commands:
    cd
    show
```

注 – 速度が 9600 以外の値に設定されている場合は、次のコマンドを使用して変更します。

```
-> set /SP/serial/host pendingspeed=9600 commitpending=true
```

6. シリアルコンソールを起動します。次のコマンドを入力して、プロンプトに回答します。

```
-> start /SP/console  
Are you sure you want to start /SP/console (y/n)? y  
Serial console started.
```

これで、サーバーモジュールのホストに接続しました。

▼ インストール済みの Solaris 10 OS を設定する

1. フロントパネルにある埋め込み式の電源ボタンを押して、サーバーの主電源を入れます。
サーバーへの電源投入の詳細は、[48 ページの「サーバーへの初めての主電源投入」](#)を参照してください。
OS の起動時に、画面に POST メッセージが表示されます。
2. (省略可能) POST が完了したら、コンソール出力をビデオポートにリダイレクトできます。
詳細は、[73 ページの「\(省略可能\) コンソール出力のビデオポートへのリダイレクト」](#)を参照してください。
3. 画面上の Solaris 10 プリインストールプロンプトに従います。
4. システムとネットワークの情報を指定するときは、[64 ページの「インストールのためのワークシート」](#)で調べた情報を入力してください。
サーバーへのネットワーク情報の割り当てに選択した方法 (DHCP または静的 IP アドレス) によって、表示される画面が異なります。
システム設定情報の入力後、サーバーが起動プロセスを完了して、Solaris ログインプロンプトが表示されます。

▼ (省略可能) コンソール出力のビデオポートへのリダイレクト

サーバーは自動的にシリアルポートにリダイレクトされます。しかし、GRUB メニューを使用して、シリアルコンソールをビデオポートに送るよう選択することができます。GRUB はオープンソースのブートローダーです。GRUB は、x86 ベースシステム版の Solaris OS のデフォルトブートローダーです。ブートローダーは、システムの電源を入れてから最初に実行されるソフトウェアプログラムです。

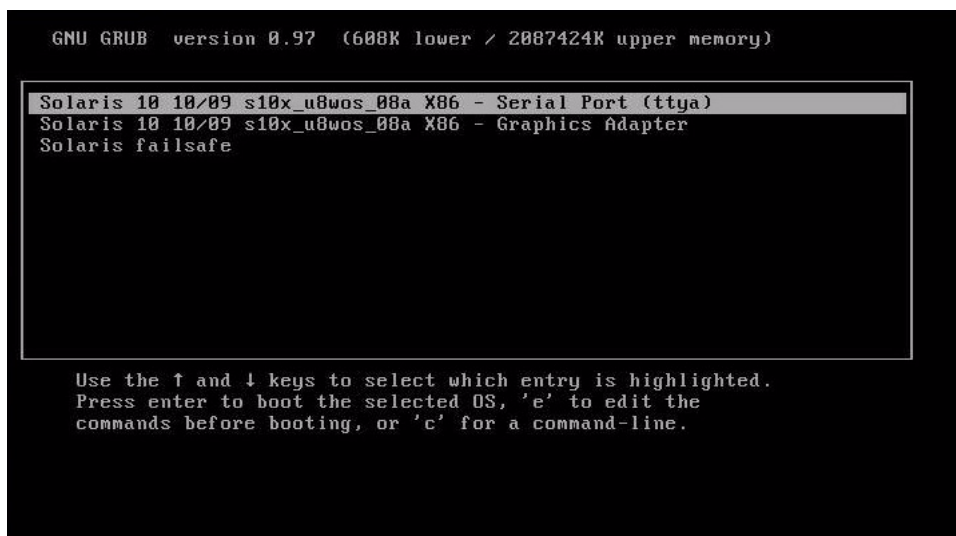
コンソール出力をビデオポートにリダイレクトするには、次の手順に従います。

1. サーバーの電源を投入して、POST メッセージを監視します。

POST が完了すると、GRUB メニューが表示されます。

GRUB メニューから、インストールプロセスを TTY 接続 (シリアルポート) または VGA 接続 (ビデオポート) に表示するオプションを選択できます (図 6-1 を参照)。

図 6-1 GRUB メニュー画面



2. ビデオポートに出力を表示するには、このオプションを選択します。

Solaris 10 10/09 s10x_u8wos_08a X86 - グラフィックスアダプタ

▼ (省略可能) GRUB メニューを自動起動に変更する

インストール済みのイメージの GRUB メニューは、電源投入時にコンソール出力を選択できるよう、タイムアウトが設定されていません。システムが自動起動するよう、この設定を変更できます。

システムが自動起動するよう GRUB メニューを変更するには、次の手順に従います。

1. GRUB メニューで **e** キーを押して、編集モードに入ります。
2. `/rpool/boot/grub/menu.1st` ファイルを編集して、タイムアウト行の `-1` の値を、メニューを表示しておく時間に変更します。
たとえば、遅延を 10 秒にするには、タイムアウト値を 10 に変更します。
3. デフォルトのブートエントリを指定する行を追加します。
たとえば、先頭エントリを指定するには、`default 10` を追加します。

Solaris 10 オペレーティングシステムのユーザー情報

この節には、Solaris 10 オペレーティングシステムに関する情報の参照先を示します。

Solaris 10 のユーザーマニュアル

Solaris 10 OS のマニュアルは、次の Web サイトから入手できます。
(<http://docs.sun.com/>)

Solaris 10 Documentation Collection のドキュメントの一覧を表示するには、Solaris 10 を選択します。指定されている場合は、x86 システム固有の説明手順に従ってください。

- Solaris 10 のインストールガイドについては、次を参照してください。
(<http://docs.sun.com/app/docs/coll/1236.1>)
- Solaris 10 の管理マニュアルについては、次を参照してください。
(<http://docs.sun.com/app/docs/coll/47.16>)
- システムのアップグレードについては、『Solaris 10 10/09 インストールガイド (Solaris Live Upgrade とアップグレードの計画) (821-0438)』を参照してください。

- トラブルシューティング情報については、『Solaris 10 10/09 インストールガイド (カスタムJumpStart/ 上級編) (821-0437)』の「付録 A」を参照してください。
- パッチおよびその他の最新情報については、『Sun Fire X4170 M2 および X4270 M2 サーバー 製品ノート』を参照してください。パッチと説明は、(<http://sunsolve.sun.com>) にある SunSolve のパッチポータルで入手できます。

Solaris 10 のマニュアルは、Solaris OS ソフトウェアに添付されている Solaris Documentation DVD にも収録されています。

Solaris インストールプログラムの使用

Solaris 10 OS DVD または CD に収録されている Solaris インストールプログラムは、グラフィカルユーザーインターフェース (Graphical User Interface、GUI) を使用して、またはリモートコンソールで対話式テキストインストーラとして実行できます。Solaris Device Configuration Assistant は、Solaris インストールプログラムに含まれています。

SPARC ベースシステムではなく、x86 ベースシステムの手順に従ってください。詳細は、インストールした Solaris 10 オペレーティングシステムのバージョン用の Solaris 10 Release and Installation Collection を参照してください。ドキュメントは、以下の Web サイトで入手できます。

(<http://docs.sun.com/app/docs/prod/solaris.10>)

インストール済みの Solaris OS を設定すると、Solaris インストールプログラムでシステムが再起動され、ログイン画面が表示されます。

Solaris オペレーティングシステムの再インストール

Solaris OS を再インストール、または Solaris OS の異なるバージョンをインストールする場合は、『Solaris 10 10/09 インストールガイド (基本編)』(820-0176) を参照してください。

Solaris オペレーティングシステムのダウンロード

Solaris OS のソフトウェアは、次の Web サイトからダウンロードできます。

- Solaris 10 オペレーティングシステムをダウンロードするには、次の Web サイトにアクセスしてください。

(<http://www.sun.com/software/solaris/get.jsp>)

- パッチをダウンロードするには、次の Web サイトにアクセスしてください。

(<http://sunsolve.sun.com/>)

第7章

補足情報

この章では、トラブルシューティング情報およびサーバーの問題のトラブルシューティング方法について説明します。また、サポートの連絡先もここに記載されています。

この章では、次の項目について説明します。

- [77 ページの「セットアップに関するトラブルシューティング」](#)
- [80 ページの「サーバーのシリアル番号を確認する」](#)

セットアップに関するトラブルシューティング

この節には、サーバーに関連する軽度の問題のトラブルシューティングに役立つ情報が含まれています。

サーバーの設置中に問題が発生した場合は、[表 7-1](#) のトラブルシューティングに関する情報を参照してください。

表 7-1 トラブルシューティングの手順

問題	問題への対処方法
サーバーの電源がオンなのに、モニターの電源がオンになりません。	<ul style="list-style-type: none">● モニターの電源ボタンがオンになっていることを確認してください。● モニターの電源コードが電源コンセントに接続されていることを確認してください。● モニターの電源コードがモニターに接続されていることを確認してください。● 電源コンセントに電力が供給されていることを確認してください。確認するには、別のデバイスを差し込んでテストしてください。
取り出しボタンを押したときに、CD または DVD をメディアトレイから取り出せません。	<ul style="list-style-type: none">● マウスを移動させるか、キーボード上のいずれかのキーを押してください。ドライブが低消費電力モードになっていることがあります。● サーバーにインストールされているユーティリティーソフトウェアを使用して、CD を取り出してください。● デバイス内のメディアが使用中でなく、オペレーティングシステムによってマウントされていないことを確認してください。
モニター画面にビデオが表示されません。	<ul style="list-style-type: none">● モニターケーブルがビデオコネクタに接続されていることを確認してください。● モニターが、別のシステムに接続された場合に動作することを確認してください。● 別のモニターがある場合は、そのモニターを元のシステムに接続して動作するかどうかを確認してください。● POST および BIOS の完了後に、モニターにビデオ出力が表示されなくなり、点滅するカーソルのみが表示される場合は、オペレーティングシステムの構成を確認して、シリアル回線上で排他的に出力をリダイレクトするように構成されているかどうかを調べてください。
前面パネルにある電源ボタンが押されているのに、サーバーの電源がオンになりません。	<p>サービス担当者に連絡する必要がある場合は、次の状況を書き留めておいてください。</p> <ul style="list-style-type: none">● システムの前面の電源/OK LED が点滅または点灯のどちらかにないか確認してください (電源コードが、システムおよび接地電源コンセントに接続されていることを確認してください)。● 電源コンセントに電力が供給されていることを確認してください。確認するには、別のデバイスを差し込んでテストしてください。● 電源の投入後 5 分以内にモニターが同期することを確認してください (モニターの緑色の LED が点滅を停止し、点灯状態になります)。● ILOM SP が完全に起動していることを確認してください。ILOM SP が完全に起動するまで電源ボタンを押さないことに注意してください。

表 7-1 トラブルシューティングの手順 (続き)

問題	問題への対処方法
キーボードまたはマウスが操作に反応しません。	<ul style="list-style-type: none"> マウスおよびキーボードのケーブルが、サーバー上の USB 2.0 コネクタに接続していることを確認してください。 サーバーの電源がオンで、前面の電源/OK LED が点灯していることを確認してください。
サーバーがスタンバイ電源モードのようだが、電源/OK LED が点滅しません。	すべてのサーバー部品がスタンバイ電源モードのときは、電源/OK LED が点滅します。テープドライブがサーバーに接続されている可能性があります。テープドライブはスタンバイ電源モードにならないので、電源/OK LED は点滅しません。
サーバーがハングしたり、動かなくなったりします。マウスやキーボード、またはアプリケーションから応答がありません。	<p>ネットワーク上の別のサーバーからシステムにアクセスしてください。</p> <ol style="list-style-type: none"> 別のシステム上で、「ping サーバーの IP アドレス」と入力します。 応答が返されたら、telnet、ssh、または rlogin のいずれかを使用してサーバーにログインします。 正常にログインしたら、ps コマンドを使用して、実行中のプロセスを一覧表示します。 kill process_ID コマンドを使用して、応答していないプロセスや実行されるべきでないプロセスを終了します。 該当する各プロセスを終了するたびに、サーバーの応答性を確認します。 <p>この手順を使用して問題を解決できない場合は、サーバーの電源を再投入します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 電源/OK ボタンを押してサーバーの電源をオフにしてから、20 - 30 秒間待機します。 電源/OK ボタンを再び押してシステムの電源を入れます。

注 - ほかのトラブルシューティング情報については、『Sun Fire X4170 M2 Server Service Manual』(821-0486)、『Sun Fire X4270 M2 Server Service Manual』(821-0488)、および『Sun x64 サーバー診断ガイド』(820-6750)を参照してください。

サーバーのシリアル番号を確認する

システムの保守を依頼するときに、使用しているサーバーのシリアル番号が必要になることがあります。将来の使用のため、この番号を記録しておいてください。次のいずれかの方法を使用して、サーバーのシリアル番号を確認します。

- サーバーのフロントパネルの左側にある RFID ラベルを確認します。このラベルには、サーバーのシリアル番号が記載されています。サーバーのフロントパネルの図は、[5 ページの「サーバーの説明」](#)を参照してください。
- サーバーのパッケージに付属している黄色い Customer Information Sheet (CIS) を確認します。このシートには、シリアル番号が記載されています。
- ILOM から show/SYS コマンドを入力するか、ILOM ブラウザインタフェースで「システム情報 (System Information)」タブに移動します。

[表 7-2](#) を使用して、サポート担当者に伝達しなければならないことがある情報を収集してください。

表 7-2 サポートに必要なシステム情報

必要なシステム構成情報	お客様の情報
サービス契約番号	
システムモデル	
オペレーティング環境	
システムのシリアル番号	
システムに接続されている周辺装置	
お客様の電子メールアドレスと電話番号、および代理の連絡先 システムの設置場所の住所	
管理者パスワード	
問題の概要と、問題が発生したときに実行した操作内容	
その他の役に立つ情報	
IP アドレス	
サーバー名 (システムのホスト名)	
ネットワークまたはインターネットのドメインネーム	
プロキシサーバー構成	

索引

A

AC OK LED
場所, 8

B

BIOS 設定ユーティリティー
ILOM SP IP アドレスの表示または割り当て, 56

D

DHCP IP アドレス, 55
DHCP サービス, 55

E

Ethernet ケーブル
接続, 47
Ethernet 接続
ILOM へのログイン, 54

G

GRUB
デフォルトブートローダー, 73

I

ILOM CLI
ILOM SP IP アドレスの表示または割り当て, 57
ILOM SP
インタフェース, 53
初回セットアップと設定, 53
接続先, 53
デフォルトのユーザー名とパスワード, 49, 54
ブートメッセージ, 71

ILOM SP コンソール
start コマンド, 49

P

PCIe カード
サポートされるカードのリスト, 11
POST メッセージ, 72

S

SER MGT/RJ-45 ポート
場所, 46
接続, 49
Solaris 10 OS
ダウンロード, 76
ユーザーマニュアルの場所, 74
再インストール, 76
SP NET MGT Ethernet
SP NET MGT Ethernet ポート, 47

い

インストールされている Solaris OS
インストール用の画面の表示, 49

お

オプション
サーバー部品, 4
オペレーティングシステム
サポート, 62
プリインストールされている Solaris OS
設定, 67

- か
 - 外部ケーブル
 - 接続, 47
 - 環境要件, 13
- き
 - ギガビット Ethernet (LAN) コネクタ, 47
- け
 - ケーブル管理アーム (CMA)
 - Sun Fire X4170 M2 サーバーへの取り付け, 29, 36, 42
 - 動作の確認, 43
 - ケーブルハンガー
 - Sun Fire X4270 M2 サーバーへの取り付け, 42
 - ケーブルハンガーを, 42
- こ
 - 工具と器機
 - サーバーの設置に必要, 1
 - 工具不要スライドレール構成部品
 - インストール, 20, 25
 - 固定部品
 - インストール, 20
- さ
 - サーバー
 - セットアップ中の問題のトラブルシューティング, 77
 - 電源シャットダウン手順, 50
 - ビデオへのコンソールのリダイレクト, 73
 - サーバーの主電源
 - オフにする, 50
 - サーバーのラック内への取り付け, 16
 - サーバーの LED
 - 場所
 - Sun Fire X4170 M2 サーバー, 5, 6
 - サーバーの開梱, 3
 - サーバーの主電源
 - オンにする, 72
 - 初めての投入, 48
 - サービスプロセッサ
 - デフォルトの通信プロパティ, 70, 71
 - サービスプロセッサインタフェース, 53
 - サービスラベル
 - サーバーの上部カバー, 16
 - サポートされる部品と機能
 - Sun Fire X4170 M2 サーバー, 9, 10
 - サポートされているオペレーティングシステム, 62
 - し
 - システム状態 LED
 - 場所, 7, 8
 - シャーシ
 - 位置決め用ピン, 20
 - 仕様
 - 環境, 13
 - 電気, 12
 - 物理, 11
 - シリアルコンソール
 - 端末セッションの開始, 70
 - シリアルコンソールモード
 - start コマンド, 70, 72
 - シリアルヌルモデムケーブル
 - 接続, 47
 - シリアル接続
 - ILOM へのログイン, 53
 - す
 - スライドレール
 - 動作の確認, 43
 - スライドレールの取り付け
 - ボルト止めスライドレール構成部品, 19
 - スライドレール構成部品, 22
 - スライドレールの取り付け
 - 工具不要スライドレール構成部品, 20
 - せ
 - 静的 IP アドレス
 - MAC アドレス, 55
 - 静電気防止アースストラップ, 4
 - 静電放電 (ESD), 4
 - 設置作業のチェックリスト, 2
 - セットアップに関するトラブルシューティング, 77

た

端末セッション

Linux クライアントからの開始, 70

Windows クライアントからの開始, 70

シリアルコンソールを使用した開始, 70

ち

注意事項, 4

て

データケーブル

接続, 45

デフォルトブートローダー

GRUB, 73

電気仕様, 12

電源/OK LED

場所, 5, 6

電源 OK LED

場所, 7, 8

電源ケーブル, 47

接続, 45, 47

電源故障 LED

場所, 7, 8

電源装置保守要求 LED

場所, 5, 6

電源ボタン

場所, 5, 6

電子部品

静電気による損傷からの保護, 4

電力消費数

意味, 12

転倒防止用バー, 25

と

ドキュメント

関連のフィードバック, xi

トラブルシューティング情報, 77

ぬ

ヌルシリアルモデムケーブル

接続, 49

は

背面パネル

コンポーネント

Sun Fire X4170 M2 サーバー, 7, 8

背面パネルのポートとコネクタ

場所

Sun Fire X4170 M2 サーバー, 46

X4170 M2 サーバー, 7, 8

ひ

ビデオポートへのリダイレクション, 73

ふ

フォーマット, 55

物理仕様, 11

プリインストールされている Solaris OS

プリインストールされている OS の設定, 67

画面上のプロンプト, 72

準備すべき事柄, 68

フロントパネル

機能と部品

Sun Fire X4170 M2 サーバー, 5, 6

ほ

ポート, 47

SER MGT/RJ-45, 47

接続, 49

保守要求 LED

場所, 5, 6

ボルト止めスライドレール構成部品, 19, 22

ら

ラックの互換性

確認, 17

ラックのポスト, 22

ラックへの取り付け, 16

ラックマウント

Sun Fire X4170 M2 サーバーへのケーブルの取り付け, 34, 41

キット, 15

ケーブルハンガー

Sun Fire X4270 M2 サーバーへの取り付け, 42

ケーブルフックとストラップ

Sun Fire X4170 M2 サーバーへの取り付け, 35

スライドレールストップ

解放, 43

転倒防止用バー, 25

ネジ穴, 22

レール幅スペーサ, 24

CMA スライドレールコネクタ, 33, 40

り

リスト

パッケージ内容, 4

れ

レール幅スペーサ, 24

レール構成部品, 15

ラックマウント, 15

ろ

ロケータ LED/ロケータボタン

場所, 5, 6